

175
8
111

東 京 圖 書 館				
一 冊	二 號	三 架	二 函	和 書 門 國 史 類

古史傳

自第三十三段
至第三十九段

八

諸國八出

廣代八出

五

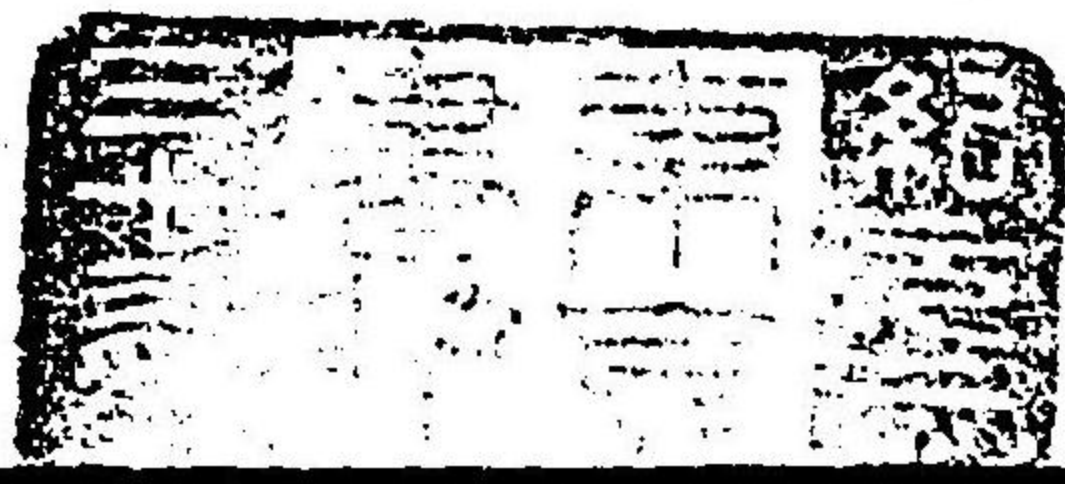
各

各

故於各中聖道天安河而相

立而中氣布山時天照大神

詔曰若汝不有異心則其所生



LIBRARY OF TOKIOFU

古史傳八出卷

明治十年納宣

東京府士族

東京書籍館

高瀬久

平篤胤謹撰

男 鐵胤

續攷

孫 延胤

カヨノカミツキヤキトイフニキ
神代上八出卷

三十三

故於_{カレ}是_コ。是_ハ各_ニ中_{オノモク}置_{ナカニ}天安河而_{オキ}相對_{アメノヤスノカハラテ}。

立_タ而_{シテ}。宇氣布出時_{ウケフトキニ}。天照大御神_{アマテラスオホミカミ}。

詔_{ノリ}曰_タ。若_{ハク}汝_{モシ}不_{イマシ}有_ズ異_{アラ}心_{ケレ}。則_キ其_コ所_ハ生_{ソノウミ}。

△三コカナズナラメヒコミコトノリタマヒヲヘテアマテラス
出子。必當男子焉言訖而天照

カホ三カ三マヅコヒワタレハヤスサノヲノミコト
大御神先乞度速須佐出男命

ノミハカセルトツカツルギラテウチヲリミキダニ
出御佩出十拳劔而打折三段

テニアメノマナナ平
而於天出真名井
亦云天淳名

出ノ真フリス、ギテサガミニカミテ
名井。振滌而佐賀美爾迦美而

ニフキウツルイブキノサギリナリマセルカミノ
於吹棄氣噴出挾霧成坐神出

三ナハタキリビメノミコトツギニサヨリビメノ
名多紀理毘賣命次挾依毘賣

ミコトツギニタギツヒメノミコトアハセテミバレラノヒメ
命次多岐都比賣命凡三柱女

ガミアレマレキ
神生坐矣。

各は師云宇氣布之時へ係て心得ばし。あがひふせ云む
が如し。源氏物語若菜上よ。おのくはまよあく契。○天

安河は。天都日の御国に在る川な流る。上第十五段注に。師云。近江国にも安河と云ふ。天武紀に見ゆ。其を天上彼を郡名と出て別ある。此時に成坐る神名の日子根も。彼国の地名ふ有。今云。近江国に日子根ま。安河あ。○中置を。中間に隔たる也。万葉十一。紅の瀬引く道。ちて此川を中置て誓給ふと。須佐之男命の御心は眞偽の知らま給はぬ故。親び給はば。御心をおきて。川は向う遠放給へるあらむ。又岩屋戸段。御言向段あ。凡て重祀御議の時。八百万神を集給ふ。いれも此河原あるを思ふ。御誓の事を重みし給ふ依て。ま。此川ハ。

大御神は。大宮地は。前ふ流る。川な流る。其邊に坐て。待向ひまし。須佐之男命。国土を参上。給ふれま。ハ。たのぢうらふ。かく川を隔て對立する。何れも此川を。火神の血に激上。て化れる。五百箇磐群の在所ま。ば。由ある事と思はる。を猶深く考べきも。比ぞ。師の神代の天上の故事を云。皆此河名を云。他流のいく筋も有。大なる河を云。○宇氣布之時。宇氣布は。宇氣比の活用語也。○乞度ハ。師云。乞取と云む。如し。即書紀に。索取度と。今人ふ與るを。此云。予。古ハ。此方へ取をも云し。あり。○三段也。上第十五段斬迦具土。

神而爲二段とある處に注す。けて二段に斬給する故に、
三柱神生坐るる處に注す。此も彼段に例あり。○天之眞名井。天、淳名井
井。去來之眞名井。師説ふ。天、眞名井と云名義を。天、淳名井
ともあるを合せて思ふ。眞、淳名井の約する名ふて。那
を切りて 眞を美稱。眞水を云ふと云ふ説 淳ハ凡て水の
那とある。 眞を美稱。例のいとうるさし。 淳ハ凡て水の
湛とる所を云。沼も同じ。 名を借字ふて之を云。之を那と云 然
まむ此を井を美て云ふ稱にて。一の井に名ふて非也。故
書紀には。掘天、眞名井二處とも有ぞうし。はと此井ハ安
河瀬に中ふて。井と云はき所を指て云ふ。別尋常
ふ云ふ井ありしふて非也。書紀に此井を云ふ傳ふを河
を云ぎるも。此故もや。

を云ぎるも。始ふ中置天安河と云おきて。今此ふ如此言
此故もや。始ふ中置天安河と云おきて。今此ふ如此言
を。別ふ非ること明らし。凡て古を泉ふまれ川ふまれ。用
る水ふ汲處を井と云ふ。とあり。けて此師説を。天之眞名
井の本義を。猶一の井を指て云ふ。とも有也。其考
ハ下。第四百四十三段。天、忍石之長井の處。 注す。○佐賀美爾迦美而此を
書紀に。結然咀嚼と書て。注す。此云佐我彌爾加武とあり。
師云。玉篇に。齧。堅聲と注す。かくまバ感齧を約て。佐
賀美とは云ふ。志加を切まバ佐。堅物を齧た。口の蹙
む謂ふ。○吹棄氣噴之狹霧ハ。布伎宇都流伊夫伎乃佐
岐理と訓す。即書紀に然 棄を宇都流と言ふ例は。八千

示神の御歌不見也。氣噴ハ氣吹と書るも同じくて。息吹
 あり。伊とのみ云。狹霧のおとを。上第十段。ふ注也。けて息字
 霧と云る例を。万葉五ふ。大野山霧立と云る我が形げく。
 於伎蘇の風は霧立わと云。息あり。十五ふ。君がゆく海邊
 此宿は霧立ば。あぐ立れなく息と知也はせ。まは猪鹿お
 霧小似と云ると云る。景行天皇。卷。雄略天皇。の息をも。
 卷。猪鹿多有云く。呼吸氣息似朝霧。あどあり。○多紀理
 毘賣命。御名。義。下の多岐都比賣命の處ふ注也。○狹依毘
 賣命。御名。義。狭ハ例此眞ふ通ふ佐。依を余呂斯の約也と
 言ふて。眞宜しの意此稱名あり。○多岐都比賣命。師云。
 多岐都也。多紀理毘賣命の多紀理と云く。河の早瀬の狀

を云言おれば。二柱ともふ。安河ふ依れる御名ふや。けて
 多紀理と。多岐都也。全意も言も同きを。二柱の御名と
 せむこぞ。いかぐと云。疑も有ぬべけまど。次此五男神の
 御名此例も皆然あまむ。疑ふげうらび。まは多岐理の伎
 濁る例あまむ。岐字を書きま。清音の紀字を書きま。ま
 田心毘賣ともあるれどを合せて思ふ。別意ありげま
 も聞ゆれど。猶上ふ云る意あるべし。さて此三神の御名
 を心の動靜を以て説るれどを更ふ由あり。田心と書る
 文字と也。思寄れる。ふや。あまむ。をうし。

於、是、速、須、佐、出、男、命、乞、度、天、照
コ、ニ、ハ、ヤ、ス、サ、ノ、ヲ、ノ、ミ、コ、ト、コ、ヒ、ワ、タ、シ、ア、マ、テ、ラ、ス

大御神所纏左御美豆良八尺

勾璉出五百津出御統出珠而

瓊響瑤瑤然於天出眞名井振

滌而佐賀美爾迦美而於吹棄

氣噴出挾霧男御子生坐矣於

是速須佐出男命興言而曰正

哉吾勝矣因其御子出御名謂

正哉吾勝勝速日天出忍穗耳

命次乞度所纏右御美豆良御

統出珠而佐賀美爾迦美而於

吹棄氣噴出狹霧成坐神出名。フキウツルイブキノサギリナリマセルカミノ三十八

天出穗日命次乞度所纏御鬘。アマノホヒノミコトツギニコヒワタシマカセルミカヅラニ

御統出珠而佐賀美爾迦美而。ミスマルノタマヲテサガニカミニテ

於吹棄氣吹出狹霧成坐神出。ニフキウツルイブキノサギリナリマセルカミノ

名天津日子根命次乞度所纏。三十八アマツヒコネノミコトツギニコヒワタシマカセル

左御手御統出珠而佐賀美爾。ヒタリノミテニスマルノタマヲテサガニニ

迦美而於吹棄氣噴出狹霧成。カミニテニフキウツルイブキノサギリナリ

坐神出名活津日子根命次乞。マセルカミノ三十八イクツヒコネノミコトツギニコヒ

度所纏右御手御統出珠而佐。ワタシマカセルミギリノミテニスマルノタマヲテサ

賀美爾迦美而於吹棄氣噴出。ガミニニカミニテニフキウツルイブキノ

サ
ギリナリマセルカ三ノ三十八クマヌクスビノ
狹霧成坐神出名熊野久須毘

命ミコト亦マタ云マラス熊野クマノ忍オレ隅命スミノミコト亦マタ云マラス熊野クマノ忍オレ踏命ホミノミコト

凡五柱男神生坐矣。

瓊響瑤アハセテイツハヒラノヒコ然オシ奴那登母ヌナトモ由良爾ユラニと訓べし。即即紀紀然然訓注
とト正正仮仮字字 奴那登ハ。奴乃於登の乃於約乃て乃とまきる
書あり。那と轉タれるおお正正瑤瑤く然然此此意意を上上九段九段ふふ云云正正但但し
彼彼をわわぎぎせせもも飛飛りし給給ふあるを此此を振振瀦瀦としてして也也ら

うし給ふれ正。○興言コトアゲ古事記古事記よを師云師云万葉六ふ千萬乃

軍奈利友言コトアゲ舉セ不ズ為ズ取キ而キ可キ來キ男常曾念オノノト七ふ八信井上ふ

事コト上アゲ不ズ為ズ友トモ十三ふ蜻島倭之因者カムカラト神柄跡カムナガラ言コト舉セ不ズ為ズ因ユ雖モト

然ドモ吾者事上オノ為ス云ク。又又葦原水穗因者カムナガラ神在カムナガラ隨事カムナガラ舉セ不ズ為ズ因ユ

雖レ然レ辭コト舉アゲ敘ズ吾カ為ル十八ふ可キ久ク之ノ安良波許登コト安氣世受アキセ杼シ

母登思波佐可延牟モトシハサカノノおど見え書紀モトシハサカノノふを興言モトシハサカノノ私記私記ふ古揚私記

言コトおど書れ稱之コトれレをモ志シり訓ル正正。さて許登コトを言コトり。又

事コトの意イふても有アげし。阿宜アキを論コトおどの阿宜アキふて事コトのさ

るコトあるコトげコトまコトまコトをコト云コトくとコト舉コトてコト言コト立コトるコトをコト言コト舉コトとコト云コトおコト正正哉哉吾吾勝勝ハハ麻マ佐サ加カ阿ア加カ都ツをを訓ルべし。其其ををおおのの生生坐坐るる

○正哉吾勝ハ麻佐加阿加都を訓べし。御子御子此此御名御名をを志志

う稱せ即字の如く正し死哉吾勝とめと言ふあり。けりて
むあり。即字の如く正し死哉吾勝とめと言ふあり。けりて
かく言ふとしは始ふ大御神の汝不有異心則其所生之
子必當男子と詔定給する御言はまふく。男子の生坐
て其赤き御心は現えれとまバあ。正哉吾勝勝速日
天之忍穗耳命。御名義師説ふ。正哉吾勝。須佐之男命の
御言舉ふ依れる御名あ。今云文は因其御子の勝速日
は加知波夜備と訓べし。古より加都乃波夜比と訓るハ
ぬも下文ふ於勝佐備云く。とあると同意よ。佐備のこ
委く云を速ハ疾く烈く猛き意。日ハ夫流とも活きて其
合せ見と。速ハ疾く烈く猛き意。日ハ夫流とも活きて其
状字云辭ふ。速日は即知波夜夫流也。波夜夫流と同意

あ。上の饒速日。燖速日。ま。饒速日。あ。ど。皆同じ。日。字。よ
ふ説あ。ど。も。例。れ。古。忍。穗。耳。ハ。大。く。耳。ふ。て。美。稱。あ。忍。の
言。を。知。ぬ。強。言。あ。め。忍。穗。耳。ハ。大。く。耳。ふ。て。美。稱。あ。忍。の
大。あ。る。あ。ぞ。上。は。忍。許。呂。別。の。所。第。八。よ。云。穂。も。大。あ
。大。は。意。を。省。死。て。富。と。比。み。云。る。例。多。し。中。ふ。も。書。紀。ふ。
三。穂。之。碕。と。ある。地名。を。古。事。記。ふ。御。大。之。前。と。書。る。あ。ど。
此。よ。と。く。合。字。ゆ。迹。く。藝。命。と。り。御。次。く。三。御。代。の。大。御。名
と。して。此。御。名。字。も。字。の。如。く。稻。穂。を。以。て。稱。奉。ま。く。む。其。一。例
れ。ど。も。彼。三。御。代。の。御。名。を。天。降。坐。て。後。此。水。穂。因。を。所。知
看。せ。る。う。子。よ。て。稱。奉。れ。る。もの。あ。る。故。に。稻。穂。は。依。る。を。
此。等。を。此。土。ふ。を。降。坐。さ。ま。バ。御。趣。異。あり。う。の。斎。庭。之。穂
の。詔。命。も。迹。く。藝。命。は。耳。は。尊。稱。れ。耳。字。ハ。も。と。神。武。天
係。れ。る。を。も。思。べ。し。耳。は。尊。稱。れ。耳。字。ハ。も。と。神。武。天
皇。の。御。子。と。ち。ふ。其。耳。と。申。ひ。多。く。其。外。の。人。名。ふ。も。多。う

遠皆同じおせあり。命とあるを以て思ひ定べし。けて耳
てふ尊稱の意を美ハ比ふ通ひて。かの産靈あど此靈あ
るを靈くと重祢とるものあり。開化天皇此大御名。大毘
毘命を申は是あり。まと應神卷れる。前津見てふ人名を。
前津耳とも有を以て耳と云を。美を二重祢とるふて。見
と云を。其を一畧けるものある事我知ばし。と何也。云れ
し説ども何也。記
傳よ就て見べし。此ふて此大御名の稱言は義ハ聞えと
るを。猶考るふ。正哉と云と也。勝速日までハ。須佐之男命
の御誓よ勝あるひて。荒進び給するふ依て。負坐る御名
あるや。やぐて忍穗耳命の御名ふ負坐るあ也。其を書紀

一書ふ。勝速日命兒天大耳尊と有を思ふべし。勝速日命
とを。即須佐之男命ふ坐し。大耳尊とを。やぐて忍穗耳命
のまとあるや。然るを師の勝速日命兒と訓て。尙兒と
ハ非交云くと云れしハ。ふとして思誤られとるものあ
也。熟事実を考へとして辨ふべし。まと火之戸幡姫兒千
千姫命。萬幡姫兒玉依姫命。あどある姫兒をも。比賣基と
訓て。一神ある由よ云れしも達へり。其を下ふ辨へてむ
けて天之忍穗と申は言義ハ。師説の如くよして。かく負
坐るあを。は。天之眞名井ふ依まゝる御稱あるばし。其を伊
勢外宮ふ。天忍穗井と云ふ御井有て。亦名を天之眞名井
と云を。此御井の原を。天忍雲根命の天上ある眞名井の
水を取降らして。天神比御教のまふく。日向因ふ術出

とまかりあざるを。後小丹波、因與謝郡比沼地、移し。ま
後小伊勢、外宮、移せるあれど、忍穗井と云名を。もと天
上ある眞名井を云名、れゆしを。此土、ふても言るあ、故こ
を明けし。故此御名を。天之眞名井、依れるあらむとを。
推量ら、ゆ、あ、れ、不、此、御、井、の、お、と、み、就、て、ハ、い、と、妙、あ、
る、事、の、み、多、う、る、を、其、を、第、百、四、十、三、段、
よ、注、○是、を、ゆ、下、何、れ、も、八、尺、勾、瓊、之、云、く、瓊、響、瑤、く、然、云
云、お、ど、云、語、あ、れ、を、上、小、讓、て、文、を、畧、ル、る、れ、ハ、。○天之穗
日、命、師、云、此、も、本、右、の、穗、耳、と、同、言、ふ、て、穗、を、大、オ、ホ、あ、ハ、日、ハ
美、と、通、ひ、て、そ、れ、美、を、右、小、云、る、耳、の、畧、あ、ゆ、キ、け、て、ま、う、穗
日、も、穗、耳、と、同、く、は、吾、勝、命、と、御、兄、弟、御、名、の、同、き、ハ、如、何

と云ふ。上の三女神の中、多紀理と多岐都も同意言
る如く。ま、次、此、熊野久須毘命を、忍踏命とも申はれ。忍
穗耳を正しく。同言ある例あり。かくれむ御兄弟、ちの
御名も、あ、ゆ、少、ハ、け、ち、ハ、を、以、て、分、奉、し、も、の、ぞ、と、ハ、ゆ、
け、て、出、雲、風、土、記、に、天、乃、夫、比、命、と、
る、を、此、命、よ、て、夫、ハ、穗、の、訛、ま、る、あ、り、神名式、山城、因、宇
治、郡、天、穗、日、命、神、社、清、和、天、皇、紀、貞、觀、四、年、六、月、山、城、因、正
六、位、上、天、穗、日、命、神、預、官、社、同、十、八、日、乙、卯、授、山、城、因、天、穗
日、命、神、從、五、位、下、と、見、え、る、ハ、。因、幡、因、高、草、郡、天、穗、日、命、神
社、清、和、天、皇、紀、貞、觀、九、年、五、月、以、因、幡、因、正、三、位、天、穗、日、命、
神、列、於、官、社、と、見、ゆ、出、雲、因、能、義、郡、天、穗、日、命、神、社、仁、壽、元

年九月授從五位下。文德實錄。天安元年六月。在出雲國。從

五位下天穗日命神預官社。と見也。まゝ近江國蒲生郡馬

見岡神社二座。と何る也。此神也。そは御子天夷鳥命あり

とぞ。此御社也。今日野大宮と云て。大社ありとぞ。天慶八

年。此御社也。貫之の書に梁簡ありて。其文より大高社者。天

穗日命神世之古趾也。於是欽明天皇御宇六年。現以創

祠。錦嶽其後天武天皇白鳳甲申仰德更作時。於彼谷而奠

儀。竟備矣。雖然赤鳥早翔。今春雨点其瑤。玄兔速過。今秋露

疵。其瑤清宮既廢矣。故今復上棟立柱。以全其佳躡。因以祝

冀。明謨朗融。四裔定焉。良弼協和。八荒安焉。四時序矣。敬白

除焉。十雨順節。穀梁登焉。俯念神明。獻聖尚垂。皇恩矣。朝臣貫

天慶八年己巳八月二日。從四位下。行木工。無位。鞍部。稻足

之謹誌。神主正六位上。出雲宿禰。貞主。工匠。無位。鞍部。稻足

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

とあり。或云右銘中。錦嶽とある也。綿山と云ふ。山あり。まゝ大

○古史傳八

○十二

人命一座を式外あり。今の社地を馬見が丘と云ふ。牧を

捨去る處ありし故。れに云り。けりて貫之主と云ふ。地

下ありし者。む。哥集。尸を。書。祓。ど。玄。蕃。頭。從。五。位。上。ハ。古

書。み。見。也。作者。部。類。ふ。天。慶。八。年。三。月。廿。八。日。木。工。頭。ふ。任

れ。こ。そ。扱。今。の。見。え。と。れ。む。此。時。從。四。位。下。小。昇。進。ら。れ。と。る

ふ。こ。そ。扱。今。の。見。え。と。れ。む。此。時。從。四。位。下。小。昇。進。ら。れ。と。る

此。處。牙。流。落。して。祿。宜。と。成。し。由。舊。記。ふ。大。神。主。出。雲。氏。断

絶。の。後。祿。宜。を。權。神。主。を。爲。し。と。見。也。古。を。御。倉。氏。を。稱。せ

し。ぐ。後。追。福。の。爲。ま。り。今。現。み。菅。谷。と。云。ふ。處。も。彼。重。方。の

二。親。れ。追。福。の。爲。ま。り。今。現。み。菅。谷。と。云。ふ。處。も。彼。重。方。の

け。て。毎。年。九。月。十。八。日。小。鍊。火。祭。と。云。ふ。此。原。を。元。和。五

年。東。九。村。西。九。村。惣。山。立。會。ひ。争。論。ふ。及。び。實。否。分。ぐ。と。く

公。儀。を。綿。向。神。社。の。社。前。に。取。り。て。鍊。火。を。取。り。握。る。人。を。定。め

東。は。音。羽。村。喜。助。西。を。益。田。村。角。兵。衛。と。云。者。あり。人。を。定。め

赤。免。て。火。花。ち。り。出。る。斧。を。喜。助。を。掌。の。せ。て。數。間。を。步

み。て。難。お。く。神。前。に。上。り。次。角。兵。衛。も。焼。斧。を。手。に。步

せ。少。し。歩。み。し。は。是。に。依。り。て。西。方。中。途。に。落。し。逃。む。と。せ。し。を。捕

孫。何。れ。と。喜。助。が。家。と。り。毎。年。此。社。に。献。物。し。て。是。を。鍊。火。祭

と云ふ。此鏡火を握れる時、公儀より角田主馬、小川吉左衛門、兩人御檢使ひて、時の老中よしも、各々出役ありしと、此社の事を記せる。綿向、○天津日子根命、名義おと神社名跡記と云ふ見えとゆ。○天津日子根命、名義おとふゆはとれし。根を尊稱。上の惶根神、ふ云るが如し。伊勢、罔桑名郡。多度神社は、此神おととぞ。延暦元年十月、敘從五位下。天長十年奉授多度大神正五位下。承和六年十二月、奉授多度大神正五位上。同十一年六月、奉授多度神從四位下。嘉祥三年九月、詔以伊勢、罔多度大神列於官社。貞觀元年正月、伊勢、罔從三位多度神正三位。同二月十七日、正三位多度神從二位。同月十九日、遣右中弁大枝朝臣音人向伊勢、罔多度神社奉授位記賤寶云々。同五年六月、正二

位。おと罔史ふ見也。今多度村と云ふ在て、多度山を桑名、城より三里むり乾は、何とる。万葉の上も、さて統紀七ふ、當藝郡多度山、美泉とあり、されば古も美濃、罔は属、ゆまや、まよ山も美濃、伊勢ふよとゆ。神社は伊勢、罔属、るや、と帳考ふ云り、おち此御社の事、ハ下ふ天、麻比止都祓命、の処よ云を合せ考べし。○活津日子根命、師云、凡て上代、神まよ人名ふも、はよ然らても活と云言多く見也。地名、お生罔あや。津罔、神賀詞ふ。今日能生日能足日といひ、神祇官坐八神、中ふも、生産靈、足産靈と並び、座摩、御巫、祭神、中ふも、生井神、福井神とも並び、是を以て思ふよ。活櫛、神とゆ起て、生活の字此意ふて、もを賀言あるを以て、美稱あるべし。近江、罔蒲生郡、彦根神社と。○熊野、久須

毘命熊野忍隅命。熊野大隅命。熊野忍踏命。師説ふ。熊野を

地名あり。出雲国意宇郡の熊野あるべし。今云。此熊野の

段段よ委く久須毘也。久志須毘也約とるあり。志須を切れ

そ此久志を奇靈あり。今云。上よ怪久志備坐。須毘也。はと

大隅命とも。忍隅命をも云。隅と同じ。凡布須美の例は

見命。伊邪河宮段。比古由牟須美命。美を耳也。畧

ありて。某産巢日神といふ巢日と通ひて。美を耳也。畧

外るあり。忍穗耳命の所ふ云るが如し。げて忍踏命とも

申はれ。忍穗耳命と申は。大御名と同意よて。美の一

畧うに多るあり。神名式。出雲国意宇郡志保美神社あ

べし。今云。出雲風土記抄。斯保弥社。を阿也。げて此神

在。母里郷井尻市上篁中。小社也と云り。

の御名ふ。出雲ある熊野てふ地名を負坐し。活津日子根

命也。近江国外る日子根て多地名残負坐るふ就て思ふ

ふ。此二柱神共ふ。天降坐けむとた布し。死事實もあく。は

と御裔も無くて。天上よ生坐て。永ふ天上ふ神留坐る神

多ちと聞えと依ふ。御名ふ此土ある地名を負ませ依事

を。姑疑ひ無きよと能を。活津日子根の天津日子根と

同じき。忍踏也。忍穗耳と同じき

と誤し。故考るよ。此時五柱男御子を生坐りとふ傳を

誤ふて。實は二柱生坐し。活津日子根命は。即天津日子根

命よ坐まし。此を近江国よ由ある神あること。熊野久須

と同言あるれ。此神の出雲、因造が祖よて、彼因ふ由ある
事。下ふ次く見えあるが如く。はと其御子天夷鳥命を。
武三熊命。武三熊大人おども申は三熊を。やがて熊野ふ
とれる名ある。我も深く考はし。然れども。此時生坐る男
御子ハ五柱ある由何の
書よもあうありて、今改むべくも非祢む。文を本の終よ
記して、考のみ記したくを。後人お布とく考へて定べし。
各ふ生坐る御子ハ三柱おく。坐まはむこそを。深き所由
何るはき事とぞ思ははく。互ハ誓ひて生給へる御子ハ
一方ハ五柱。一方ハ三柱と異
あるべし。詔をおき事。ありとく考ふべし。
○或人問。此誓ハ。も須佐之男命
の御心ハ明き哉。顯さむ爲あるふ。大御神も。諸共ふ宇氣
比給ふ。如何答前ふ云。る如く。宇氣比を。己が心の眞實

を顯し。はと其思ふ事ハ當否の徴を見むとける事あれ
む。實を一人して爲はきおざれる哉。須佐之男命ハ。各誓
てと申し給する。我ハ心。大御神の思召は如くおはあら
ぬを。其ハ御自も誓ひて。當否ハ徴を見給へや。此御言お
るは。大御神ハ。須佐之男命ハ。然を白し給する。おれ
深く疑ハ。おれ思看し。うば。其御疑の御心ハ。當否を。試給
ハ。むと志て。其白し給ふは。ふく。互ふ宇氣比給へるお
ら。年加し。故ふ須佐之男命ハ。決て生得給ふは。じく思
召は。男御子を。何て。汝ハ。不有異心。則其所生之子。必當男
子。と詔ひ定給ひ。る。おの定給へる御言や
がて宇氣比言あり。 實は須佐之男

於是天照大御神方知看速須

大御神と須佐之男命と御交合坐て生まへる御子と
れと云ま須佐之男命別婦み御合て生給子るありと
も云を皆擲もあき妄言あり昭け古傳言を信べし
己が私の推測ハ何ごとぞ必夫婦交合ざれむ子成
物と思ふハ神道の奇霊を思て尋常の理み迷へる
正ま三女天照大御神の心化りて無形此神五男
須佐之男命の身化りて有形此神ありと云も例のみ
ゆ言あり凡て心化身化あどうるさ名目を設けて
子分を凡古古さら無きおとみして後世此私事
事跡の傳は無形と申はもさらふ其證あしとる
紀理毘賣命を娶坐る事もあるをバ如何やうせむ
此三女五男神の御事を云る世く
御事を云る世く
みさまのの癖
説おろしうし

命ハ女御子を生坐へべく己命を男御子を生坐むと所
思し定給ひらむを其所思し定給へる御心と違ひて己
命を女御子を生坐し須佐之男命ハ男御子を生坐るふ
依てぞ其明き御心を顯れ給へるれらる師云或説よ此善
を全皇嗣を主と
し給ふあり故日神も共善むとるふありと云ハ意得
姿若然らば此段を凡て方便を以て候み種々の相を現
し示は佛經の事み異あらば凡て神の御子疑ひ給ふも
げをあきおとあり大御神の須佐之男命を疑ひ給ふも
本よ正眞実おれ此善む天津日嗣所知看去べき御子
の生坐むことを豫ふいりて知看さむそのう牙善て
御子を生むと申し給ふも須佐之男命の講申しとるへ
ることを大御神の御心よ正出しことおもあらざる
物をや但し此御善ふ皇太子の生ませるおを深き所
由ありて本と此御善ふ皇太子の生ませるおを深き所
神の御心も豫る然あるべく定まらばおを深き所
てふ物とを異あるものぞま或説よ三女五男を此時

サノヲノミコトノモトヨリナキコトヲアヒキコノロキカレノリ
佐出男命出。固無惡意矣。故詔

曰。是於後所生出。五柱男子者。

物實因我物而所成也。故自吾

子也。於先所生出。三柱女子者。

物實因汝物而所成也。故乃汝

子也。如此詔別給矣。

方知看固無惡意矣。大御神ハ加ふくみ。須佐之男命此。
高天原を奪はむとの。惡き御心有て參上^{マキノボ}給^{タマ}するあら
むと。疑ひ所思^{オボ}を。そ此詔定給^{ウケタマ}へるまふく。男御子
を生坐^マしうむ。此^{コノ}方^{カタ}で須佐之男命の固^{カタ}と^トり惡心^{アクミココロ}を
坐^マまさ^サび。御暇請^{ミヨクダシ}し給^{タマ}ひむ。赤き御心よて。昇坐^{ノボリマ}る
おることを知看せる由^ユあり。此^{コノ}大御神と申^ウせども。多^タく
を得知給^{ウケタマ}へば。宇氣比の御事^{ミヨコト}に依^ヨてこそ。方^{カタ}で赤き心を
は^ハ知得給^{ウケタマ}へば。然るを況^シて凡人とある。仏聖人^{ブツセイジン}あど云^イ物
の自^ミ他の心を察通^{サツトウ}ひあど云言^イの空言^{カラコト}あるを。知^チべし。
世^セ此^{コノ}漢意^{カンイ}仏意^{ブツイ}の徒^タあど。此^{コノ}を^ヲしも何^ニと論^ロひ^テあ^ラむ^{コト}聞^クま

し。○是於後ハ本小是後と有を師説ふ。おは是と軽く讀
切べし。是後と連讀べうらび。是とは五男三女を總て指
去御言おれどお也。を言れしよ依て。目易く於字字入て
文字成し扱。○所生之阿禮麻世流と訓ばし。阿礼坐と云
ことは神武
天皇卷よ見えと也。彼
処小委く注ふべし。 けて此の御言を汝所生吾所生と
有べきおとあゆふ。然ハ何らて。あ後先とあるこそを。
師云。此時生坐る神とちを。誓け間ふ一連よ生坐て。三女
五男共ふ。大御神と。須佐之男命との御子ふて。此を大御
神の御子。此を須佐之男命の御子ぞ云分た。本あらび。此
此詔ふ。あ。先後を以て詔ふた。此故お也。あ不此事下よ
も次くいふを

見べし。○今云。此餘よ書紀の旨と古事記の旨と違へる
由を言れとる説を何れど。よく見れど。二典此旨とも小
異あるおとれき故お其説を漏し けて後小生坐る方を
扱見む人あらべ見て曉るべし。 けて後小生坐る方を
先詔ひ。先小生坐る方を次よ詔ふは。物實の尊卑を以て
お也。御自詔ふ御言あるは如此
也。大御神の等きこと知べし。○男子女子を。師云。比
古美古比賣美古と訓ばし。比古美古を子てふ言重お孝
る小似とまど苦しのらび 孝
元紀小生二男一女。まよ垂仁紀よ。生三男。おれらの男女
を然訓るよ依まゆ。○物實ハ。師云。毛能邪泥と訓ばし。崇
神
紀よ。物実此云。望能志
呂とあるを別事あり。書紀おを物根と何也。佐泥と多泥
とは。其物も名も通ずり。後世よも。人の母を云よを。某腹。
父を云よを。某種と云。本草の種子も同じ。此も其意あり。

故其先所生出神。多紀理毘賣

谷川氏が五男神を物実日神此物あれむ日神ハ父の如く須佐之男命を母の如しと云るハさるることなり。○今云此は依てお不思ふ。三女神を物実須佐之男命此物おまきバ須佐之男命を御父の如く大御神を御母の如き謂よあむ。○我物とは彼御統之珠を詔ふなり。○自吾子有なる。也師云この自を下文ふ自我勝とある自よ同じ彼處ふ説あり。第四十。○汝物を十拳劔あむ。○詔別給とは師云。五男三女渾て一ふ。大御神と須佐之男命との御子よて。本を何きの御子と云別を無きを今始て物實を尋て如此別とるふなり。詔別と云語を應神卷よもあり。

命者。亦云田心。坐胸形出奥津

宮。故亦名謂瀛津島比賣命。次

狹依毘賣命者。亦名市杵。坐胸

形出中津宮。故亦名謂中津島

比賣命。次多岐都比賣命者。亦云

高津比タカツヒ坐胸形出邊津宮故亦マスマナカタノヘツツニヤニカレマタノ

賣命メノミコト名謂邊津島比賣命此三柱神ミナラマラスヘツツシマヒメノミコトコノミバシラノカミ

者胸形君等出持伊都久三前ハムナカタノキミラガモチイツクミマヘノ

大神也此大神自天降而居埼オホカミナリコノオホカミヨリアメクダリテマササキ

門山出時以青靺玉置奥津宮トヤマニトキニモテアラヌノタマヲオキオキツツミヤ

出表以八坂紫靺玉置中津宮ノシルレニモテヤサカノムラサキヌノタマヲオキナカツツミヤ

出表以八咫鏡置邊津宮出表ノシルレニモテヤタカヅミヲオキヘツツミヤノシルレニ

以此三表成神體出形而納置モテコノミツノシルレヲナシカムザネノミカタトテヲサメオキ

三宮而隱出因云身形郡亦坐ミツノミヤニテイハヒタマヒキカレイフムナカタノコホリトマタマス

豐圀宇佐島矣トヨクニノウサノシマニ

田心毘賣命。田心を多許理と訓げし。即本小然訓め心を
十段八意思兼神。此は多紀理の轉れるふて。異なる處と
の処に注べし。

ぬし。○胸形ハ。和名抄ふ。筑前国宗像郡これなり。名

義ハ下文に見也。○奥津宮。師云。此處也。今奥島と云島小

て。大島の西北四十八里ありとぞ。或三十里やも五十餘

程あり。まゝと宗像社記云。奥津島ハ。今奥之島と云て。大

島とゆ。北方海中四十八里にして。島の外ぐり一里あり。

人家あり。社を西南に向て立ゑまふ。山下平地の高き所

あり。今社一人。大島に住て。河野氏みて。一乃甲斐と称

と云。はと遠賀島ともいふと云ゆ。故思ふ。和名抄ふ。宗

像。是る。其郡も宗像と云郷も見也。されど彼国の地理

を知らず。此をいか。有む。今ハ驚かし。わくあり。

○市杵島比賣命。師説ふ。市杵ハ以ておくし。此神の御

と云。市杵と云こと。前後の二柱の御名此例をハ類也。と云。神名式。安藝国佐伯

郡。伊都伎島神社。大。あ。此神ありとぞ。貞觀元年正月

正五位下。伊都岐島神。從四位下。同九年十月。授從四位上。

と因史に見也。百練抄。治承三年二月廿四日。以安藝国

伊都岐島社。可加。廿二社之次第。并祭祀。日事等有。其沙汰。

右大臣以下。大外記頼業。師尚等。預勅問計。申之。以二月十

一月上。申日。可爲祭祀。式日之由。被定仰。先議才卿。月十八

日。上皇幸。大相国。亭。安藝。伊都岐島。小巫。廻雪之袖。爲。獻覽也。と見え。はと山槐記。同

年三月二十六日。伊都伎島祭也。其詔旨。始。自。今年十一

祭。尔。限。以。永代。天。幣。帛。潔。妙。と云。○此御社。今。嚴島。海

るをし、帳考ふ云り。さて島名をいれおく。○中津宮師云。まよと云え。此御名を正出とあるべし。

此處は、今大島と云まよ中津島と云といひたり。島ふて、神湊と云處と

正。三里北の海中ふ在せど。まよ田島より北三里とも云正社記云中津宮を今ハ大島

と云て、神湊は海濱と云。三里北の海中ふあり。島の免ぐ

正。三里人家多くあり。社人一人、河野氏にて、二乃甲斐といふと

云り。○高津比賣命、高津を多岐都の轉マタれる言ふて、異

ある事あり。○邊津宮師云。此處は、今田島と云せど。或人云今

の宗像宮を、田島と云。或は此御社、古神湊と云海邊に坐

一里半ばかり隔れり。しを、後ふ今、地を移奉ま正とも云正。信ユキみ然らば、古の邊

津宮を神湊ふて。名も由有てきこ也。今ハ田島の地ふを非ざ正

ゆ。猶とく尋ぬべし。宗像社記云、辺津宮を田島村にあり、社を西北に向ひ立とまふ。古を神湊

の東六町ふあり。今も其跡を、神の幸屋敷と云て、田島を

正。半里許、系カネぐり、まゆ、後深草天皇、建長年中、大宮司長氏

の時、神は告ツケむと正。田島を遷し奉ると云。傳ふ昔、大宮

司を、田島に居住と云。正。天正年中、小滅亡びて、其後

おろし、残れるを、三所の社人、合せて十三人あり。其内十

一人ハ、田島の社職あり。其内三家を、大宮司の子孫と

て、深田氏、二家、嶺氏、一家これあり。十三人此内二人を、大

島に住て、其内一人を、中津宮、一人を、澳津宮、此社人あり

と云。ちて、奥中邊とは、其在所を以て名けしお正。今云、お

よ坐に、神名書紀と社記の説と、各々違あるを、今も古事

記に依てあるあり。其を、下ふ、大國主、神は、奥津宮に坐に

多紀理毘賣命、御合坐し、まよ、辺津宮に坐に。高津比賣命、御合坐に、と有ま、まよ、叶へれどあり。○胸形、君、姓氏錄、河内、國、ふ、宗形、君、大國主、命、六世、孫、吾、田、片、隅、命、之後也。と見ゆ。もよ、君の加婆禰お正しを、天武天皇紀、三十

年十一月、胸方、君、賜、姓、曰、朝、臣、とあり。故、姓氏錄、宗形、朝臣ともあり。

て此三神を。此氏人の以祭く所以也。下第百段。大國主神。

娶胸形、奥津宮坐多紀理毘賣命而令生給之子。味鋌高日

子根神云く。ま第百と三段。娶邊津宮坐高津比賣命而令生給

之子。積羽八重言代主神と有了。師云或説よ此大國主神

命を娶坐と云ことを信びして。おむ其奇女を娶るあり

と云む。さらし由あき私の妄説あり。無形の神ぞあど云

ふ。後世の謬説を守り。大國主神を素よ。此御社ふ因あ

るを。胸形氏の始祖。天日方奇日方命は。即吾田片隅命の

大國主神。此和御魂。三輪大物主神の。武茅渟祇命の女。勢

夜陀多良比賣を娠して。生せ給へる御子あ。しうば。其

因ふ依て。奇日方命。此世孫。大田く根子命。崇神天皇此

御世ふ。始て大三輪社ふ仕奉れ。彼卷七年の処。おれ大

神氏の始祖あ。かくまむ。胸形氏を。上件の所由ふ依て。

大神氏より別ゆて。此御社ふ仕奉まるあるべし。姓氏録

別。宗形朝臣。同祖。吾田片隅。師云。宗形朝臣。身麻呂てふ

命之後也。と有を思ふべし。人。宗形郡。大領ふて。宗形神主とること。續紀十。十三ふ見

え。大領とること。ハ。て。然る例あ。しを。延曆十九年十二

月。勅ふ。彼郡。大領として。此神主を兼帯る。おとを停免ら

れしこと。は。此神主の任。六年ふ限りて。相替る。おとあ

ぞ。後紀ふ見え。今云。おむ此氏のおむ。崇神天皇。卷八

見べ。○三前大神神名式。筑前國宗像郡。和名抄。宗像

宗像神社二座。並名を何也。此神の御事。應神天皇卷。雄略天皇卷。おどよも出て神功皇后此韓を降伏給ふ時。此大神相共ミカウふ力を加予給ひし事何也。まゝ履中天皇卷。坐于筑紫三神と何るも是あり。お承和七年四月授勳八等宗像神。從五位下。嘉祥二年十月從五位上。仁壽二年二月加正五位下。天安元年十月正四位下。勳八等宗像神授正三位。貞觀元年正月從二位。同年二月正二位。おど囡史み見えと也。お不此餘ふ。大和囡城上郡宗像神社三座。並大月次。○類聚三代格。宗像神坐城上郡登美山と何る此お也。雄略天皇紀九年遣凡河内直香賜与采女祠胸方神と何り。此時帝都也。此郡長谷朝倉宮ありしう。謂胸方神を當社り。まゝ格文ふ。登美山と有る。今外山村

う。社を今を春日と。元慶四年二月。以大和囡城上郡宗像神預於官社。同五年十月。大和囡城上郡從一位勳八等。宗像神社。准筑前囡本社置神主。以高階真人氏人爲之。おど囡史み見え也。然れむ。此御社を筑前と也。移祭られしれ也。此郡ふ大三輪神の鎮坐せむ。さも有べき事。およ尾張囡中嶋郡宗形神社。當囡神名帳。從二位宗形。書その集説と云もの。今囡府宮の。下野囡寒川郡胸形神。別宮角玉社。云こまありと云り。當囡此式社考ふ。今寒川村ふありと。伯耆囡會見郡胸形神社。隣郡那須郡ふ三和神社もあり。伯耆囡齊衡三年八月。伯耆囡宗形神。從五位上。と囡史み見也。今胸形村と云。在り。と帳考ふ。云備前囡赤坂郡宗形神社。今足里村と云。在り。と當囡式社考ふ。云。り。さて同郡ふ並て。鴨神社有り。此を言代主神。味鋸高日子

根神子坐せ^ル由^ル事^ト、上^ニ云^フガ如^ク、津高郡宗形神社。
今大窪村と云^フ在^リ巴^ト、と式社考^ス云^フ巴^ト、はて同郡^ニ並^ビあ
て、鴨神社あり、ま^と隣郡上道郡^ニ大^ニ神^ト神社もあ^リ、あ
ど式^ノ在^リ巴^ト。○^{サキ}埜門山。此山の在所^ト同^ジ圀内^ニあ^ル、は^ハま
ど詳^カあら^ズ。之^ノ玉^ノ正^ニ英^トとい^フ人^ノ此^ノ説^ヲ、三女神始^メ降臨
頂^ニ磐石あり、常^ニ清^ニ水を^ニ湛^スへ、早^ニ魃^ノを^ニ距^スこと、東^ニへ五十町、絶
雪^ニ汚^レれ^ズ、此^ノを石清水^トと稱^スふ、後^ニ今^ノの社地^ニ遷^リ祭^ル
とあり、然^レま^と埜門山^ヲ云^フ。○青^ニ鞋^ノ玉^ハ、阿^ヲ袁^ヲ奴^ヲ能^ヲ玉^ト
今い^フ御許山^ノ古名^{アリ}あり。○青^ニ鞋^ノ玉^ハ、阿^ヲ袁^ヲ奴^ヲ能^ヲ玉^ト
訓^{ベシ}。奴^ヲを^ニ玉^トを^ニ云^フ古言^{アリ}あり。上^ニ第^ニ五^ノ段^ニ天^ノ、^ハ云^フ
ガ如^クし。書^ニ紀^ス。瓊^ノ字^ヲ書^テ瓊^ト、此^ニ云^フ努^トを^ニあ^リ、は^ハて鞋^ノ字^ヲ
さ^ハ飛^ビ瓊^ノ由^{アリ}、れ^ド古書^ニは^ハ、此^ノ字^ヲ用^ヒと^シ。其^レ
を^ニ舊^ノ事^ノ紀^ス。天^ノ鞋^ヲ槍^ヲを^ニ書^ク。天^ノ武^ノ天^ノ皇^ノ紀^ス。大^ニ鞋^ノ娘^トと見^エ。

聖^ニ武^ノ天^ノ皇^ノ紀^ス。大^ニ鞋^ノ比^ヲ賣^トと^シ。師^ニ云^フ、鞋^ノ字^ヲ、さ^ハら^ハ玉^ノ子^ト
書^ク、ご^トき例^ニ、璿^ノ字^ヲあ^リ、は^ハて鞋^ノと^シ。玉^ノの事^ヲあら^ハむ^ルを、
を^ニ遊^ビと書^クる^ヲを誤^ルる^ヲ。は^ハて鞋^ノと^シ。玉^ノの事^ヲあら^ハむ^ルを、
鞋^ノ玉^トと云^フむ^ルと、重^カてい^ハか^クを思^フべ^シれ^ド。此^ノを八坂
瓊^ノ曲^ノ玉^ヲあ^リと云^フ例^{アリ}。古言^ノの格^{アリ}、神^ノ壽^ノ詞^ニ、青^ニ玉^ノ能^ク水、
江^ノ玉^ノ乃^ク云^フと^シ、あ^リる^ヲ青^ニ玉^ノ同^ジ。○八尺^ノ紫^ニ鞋^ノ玉^ハ、八尺^ノを彌^ル
眞^ニ明^キあ^リる^ヲあ^リ、上^ニ云^フ。は^ハて此^ノを紫^ニ彌^ル眞^ニ明^キ玉^ノあ^リ
由^リ巴^ト。○八尺^ノ鏡^ノのあ^リと^シ。下^ニ第^ニ四^ノ十^ノ段^ニ、^ハ委^ク云^フは^ハて
三^ノ宮^ノ。此^ノ三^ノ表^ヲを置^クる^ヲは、此^ノ神^ノと^シち^ノ置^クる^ヲへ^ハあ^リ巴^ト。
上^ニ文^ノ居^ル埜門山^ニ時^ニ、あ^リる^ヲあ^リを思^フは^ハて、は^ハて三^ノ宮^ノを^ニあ^リ。
と表^ヲを^ニみ^テ残^シ留^メて、現^ニ身^ヲを何^ノ處^ニ坐^マせ^ルと云^フ。

須佐之男命此率て。ひとまね根之堅洲國カタクニに往坐せし思
ハ依りあり。其由を、第八十六段、須勢理毘賣、命の処に云ふを合せ考ふべし。されバ埒門
山に居ませるを。その降坐る。唯志はし此間ホトあるべし。○
成神體之形、而八字に如くして。彼三表を三柱神の御身
に形代と爲て。と云ふ也。○隱之は伊波比給比伎ヒタキと訓べ
し。言義を、第三百三十 ○因云、身形郡郡名義おれよて聞え
三段に注べし。 多也。まよ本書ふ。後人改曰、宗像とあり。此を民部式に。凡
諸國部内郡里等、名並用二字、必取嘉名。と有て其より以
前ふも。此制ありしと聞えて。出雲風土記に。彼國の地名
に字を神龜三年に改るとる由多く見えぬれむ。此布どふ

や改らむ。扱古書に。胸形。宗形。胸方外ど。くさくふ書ま
ど。此に身形と書るは正字よて。宗像を書む。郡名に嘉名ヨキナ
を取る。後の御制ミササと知べし。和名抄に。筑前國宗像牟奈郡
にあり。身ミを牟ヌと云を例多し。即身之形の義ある。けり。けり。貝
原氏に。當國の續風土記に。宗像山を赤馬山外に。宗像、瀧
を國府村に在り。おれも云まむ。ける山、名も龍、名も有る
也。まよ和名抄に。此、鄰郡遠賀郡に。宗像郷あり。此を古宗
像、郡と一郡ありし。後に分りたるよは非る。上あり。奥津宮
の処に注せる師。けり。郡を許富理ホリと訓こと。はよ郡縣を
説を合せ考べし。けり。成務天皇、卷五年の処に委く注げし。○宇佐嶋に。

和名抄云。豐前國宇佐郡。とある是也。此地のおと、委く
神武天皇卷子注
ふべし。神名式云。豐前國宇佐郡。八幡大菩薩宇佐宮。大神也。

ある。東大寺戒壇神名帳云。八幡宮。ハツマ宮此第二殿也。

三柱女神坐まはるとぞ。其を八幡本紀云。三所神殿相並東

佐宮也。中為第二殿。是田心姫命。湍津姫命。市杵島命也。号

道主貴。此三神先八幡宮鎮座。此地仍為地主神。是宇佐大

宮司家説也。第三殿大帶姫命也。凡御宮地山也。則小倉山

是也。川水廻流如島故云。宇佐大宮司宇佐公。姓宇佐都

彦命之後也。祠官四姓。宇佐大神。田部漆島と見也。信小此

説の如くあるべし。宇佐都比古命の事也。神武天皇卷子
見えたり。はて此御社に大神氏比仕奉ること。上文胸形
君此下云。事由あり。見合はべし。臨時祭式云。凡八
幡宮司以大神宇佐二氏補之。不得雜補他氏。按此處
と見えたり。大神を為る。おと二女神。由あり。按此處
も。此女神とちの天降坐して。住坐せし一所あり。む所

由に依て。古く社を在しを。後八幡大御神と。息長帯比

賣命を配祭せ給ふる。おと有はき。然る例い少多う也。お

此宮の事也。應神天皇卷。まゝ清和天皇紀。貞觀元年
元年此処に委く注べし。まゝ清和天皇紀。貞觀元年
政大臣藤原良の東京一條第。此三神社有て。筑前國宗

像神。正二位を授奉給ふ時。共正二位を授奉。とる

ふことと見えし也。

故其後所生出。五柱男子出中。
カレソノノチニアレマセル イツハシラノヒコミコノナカニ

正哉吾勝勝速日天出忍穗耳
マサカア カツカチハヤビ アメノオシホ ミノ

命者。ミコトハ亦マタ云マス天アメノ大オホ耳ミコト命ト亦マタ云マス天アメノ忍オシ總ホ根ネ命ミコト亦マタ云マス天アメノ忍オシ總ホ別ワケ命ミコト

天照大御神特鍾愛而常懷御

腋而育賜矣仍奉稱腋子矣此

神御合產巢日神出御女天萬

栲幡千幡比賣命カクハタチハタヒメノミコト亦マタ云マス栲タク幡ハタ千チ比ヒ賣メ命ミコト亦マタ

云マス萬ヨロツ幡ハタ比賣命ヒメノミコト亦マタ名ナ萬マン幡ハタ豐トヨ秋アキ津ツ師シ比ヒ

賣命メノミコト亦マタ云マス萬ヨロツ幡ハタ豐トヨ亦マタ名ナ火ヒ出デ戶ト

幡比賣命出兒玉依毘賣命而

先所生出神名天照罔照日子

火明命ホアカリノミコト亦マタ云マス天アメノ此コノ神カミ娶ミア天アメノ道ミチ日ヒ

メノミコトニテ。ウミマセルミコ。アマノカグヤノミコト。女命而所生出兒。天香山命。亦マタ

天香山命。此者尾張國造尾張連。天香山命。香山命。此者尾張國造尾張連。

丹波國造石作連。丹比連。禊多タニハノクニノミヤツコイシツクリノムラジタヂヒロノムラジタスキタ

治比宿禰。蝮壬部首。丹比周敷ヂヒノスクネタヂヒニフノオビトタヂヒスフノ

連。津守連等出祖也。ムラジツモリノムラジラガオヤナリ

天大耳命。御名義ハ。上第三十天之忍穗耳命と申は御名

の處に注せる。師説ふ依て心得べし。○天之忍穗根命マ

も書ゆ。師説ふ忍穗を上よ云る如く。大オホシホおみ。根も耳と

云ぐ如き尊稱よて。某根と云を殊よ多く。上上のの惶根神上

ある日子根も同じ。けて開化卷ある。神大根王を。書紀よ

神骨カミホネとて。此例ふて忍穗根を。忍大根れるおと。我知彦

し。まこと穗耳の大耳ある。とて。さて神名式ふ。山城國宇

治郡ふ。許波多神社三座。並並大月とある御社の祭神を。山

城風土記よ。宇治郡木幡社祇名天忍穗根命とあり。此此を

引る文あり。さて此文二所ふあるうち。末引る所所を

穗井此名をまゝ忍石之長井とも云ふ長子由ありて聞
ゆれどあゆぬ如風土記者宗廟之神等崇可異他如弘長諸祭
真行之時當社祈年月次祭幣帛神主請取之由載本官史
生散狀當時現在如と云はて三座の内一座を風土記
の傳ふて炳焉を餘りの二座を何れ神ならむ若くハ天
穗日命天津日子根命をあらざる。此御社に並て天穗
日命神社を載とれど別神ある。まゝ宇佐宮を八幡と
申し此御社を木幡と申はこと柔田強田と對しと
と聞えて由ありげあり。後人あ不熟考ふべし。はて
清和天皇紀も貞觀元年正月授許波多神從五位上と見
也。まの御社を今木幡山とまゝ式ふ豊前國田河郡忍
骨神社あり此神も坐り非終り思ひ定めがとし。仁明天
和四年の処清和天皇紀貞觀七年二月の処
あどふ此神此事見えとり披き見て考べし。○天忍穗別
命此を舊事紀に見えある亦名あり。まゝ若くは石門別
命の名を忍石別と

云ふが移りて忍穗別とある。○腋子。本書に此處の注
を似とると誤れる。ぬらむ。○腋子。本書に此處の注
ふ。今俗號稚子謂和可古是其轉語也といふ。此に依て按
ふ。凡て和加てふ言を此の故事より出ると言ふても
せ和伎ありし。和久とも和加とも轉れる。彼某和
久基てふことを是より起れるあり。此史にも數見
え。万葉にも數有。三卷の巻みおし久米能若子十四
あ。○天萬栲幡千幡比賣命。栲幡千く比賣命萬幡比賣命。
師云纂疏。幡猶機也。夫女功之事以織紵爲本。故取以爲
名也。といふ。此意あり。但し機具を指て云うは非。織
る物。絹布を云ふ。仲哀卷ふ千繒高繒万葉子倭文幡之
類の類を云ふ。帯和名抄。綺加无波太あど云。是ら

皆織れる物を指て。万葉十ふ古よ織てし八多を此ゆふ
波多と云例あり。 る。衣小縫て云く。是も織とる物を指て八多と云也。然れ
尤栲幡も栲布を云るおと。倭文布を倭文幡と云よ準へ
て知れし。萬を懸居大人説ふ。宜てふ言を物の足り備ま
ゆを云。與呂豆。與呂比おども此と別まると言お也。と
ある。此小依て思ふよ。此も數の万れ意ふを非て不足と
とれく。美麗く織ゆく比牙とる布帛てふ意よ。萬幡とも
萬栲幡とも云おゆ。 千幡といひ千く比賣と云小照して
の意お千は斯くの約とるふて。 凡て同音の重ある言
例常の千くとあると同じ。其由を和名抄ふ。釋名云。穀其
事あり。

形緘く視之如粟也。唐韻云緘繒文貌也。此間云之く良岐と。
とある。緘ハ他の字書小縮也とあり。然れむ之く良岐と。
縮とは貌みて。今世此縮布縮緬あどの如くある哉云お
也。さるを上代ふも布帛れ緘きとるを。美好物よ志ける
故の御名あるばし。○萬幡豐秋津師比賣命。萬幡豐秋津
比賣命。師云。秋津師也。万葉三ふ。秋津羽之袖。十三ふ。蜻蛉
巾あどある如く。蜻蛉の羽乃如く。薄く細精き帛布を云
れ也。仁徳卷。皇后御歌ふ。夏虫れ火虫の衣。とあるも同意
あり。 古漢籍よも衣のうるをし師を師く此約とるふ
て。 知を虫の羽小譬云、依あり。師を師く此約とるふ
て。知く牟を志く牟とも通ハし云む。上ある千くと。此乃

師と同くて共ニ緘シきスるを云ハル也。大鏡ニ。髪ヲちグル也。秋津比賣トモ申ヒテ。此師ヲ入マシテも稱セル也。○火之戸幡比賣命。火は借字ニ。小て梭ト也。故ニ富ト訓ハむ也。和名抄織機具ト。通俗文ニ云フ受緯ト。和名比亦謂フ之ヲ梭ト。今按テ等ノ說文ニ云フ杼者機ノ之持緯者也。と見え。字鏡ニ。杼ト。杼ト。絹織ト。比伊ト。とある是也。戸ハ豊ト也。豊秋津比賣の豊ト同く美稱也。○玉依毘賣命。玉は容顔ノ美麗キを稱スる也。とあるはく。依テ師ニ云フ字ヲ借リて。余呂志ト切ル也。余呂志は縣居大人ト。説フ。物の足メ具ス。依テを云フ。余呂豆。余呂布。れども。同言ノ分レる也。万葉一ニ。取與ル。呂布天乃香。

具山トある也。此山ノをシらフ。おシ。此ハひ足トある也。我ト云フる也。也。はト宜シ奈シ倍シ吾カ背カ乃君ト。おシ云フ。依テも同シ。と云フれト依テ如シ。此意ヲ以テ美稱トる名あり也。名ノ例ト。男トを飯依ト。と女トを伊須氣余理比賣。息長。水依比賣。水穗。五百依比賣。おシ。り。続紀ニ。廿七ト。与呂志女ト云フ。名モ見えトあり也。とあり。ちテ玉依テても同名ハ。海神ノ御女ト。玉依毘賣命ト。第百六十三段ニ見ル也。三嶋溝ニ。織耳神ノ女ト。活玉依毘賣トあり。賀茂御祖ノ御名モ。玉依毘賣命ト也。まト此比賣命ノ御兄ト。皆右レ比意ノ稱名也。ちテ書紀ニ。一書ノ又レ説フ。天大耳命ト。ある丹ノ易ノ姫ト。此レる玉依毘賣命ノ異ト。○天照罔照日子。火明命。天火明命ト。二ツの火明トもホ本阿加理ト訓ハし能。

と能を請付
るを已ろし。けりて御名義。まこそ此委祀古せを。下第四十

ふ云はし。○天香山命。此命の御名此意も。下第四十六段。ふ云

はし。○尾張國造。尾張連。尾張を國名ふ。和名抄ふ。乎波

利と何。此國のおと委くハ景行天皇。卷ふ注べし。國造

本紀云。尾張國造志賀高穴穗朝。以天別天。火明命十世孫。

小止與命。定賜國造と見え連姓のおやハ。上第二十五段。ふ注

已祀。姓氏錄山城國神別天孫部。ふ尾張連。火明命子。天香山命之後

也。ま左京神別。尾張連。火明命之男。天香吾山命之後也。と見

え。尾張宿禰。火明命二十世孫。阿曾連之後也。ま右京神別。尾

張連。火明命五世孫。武礪目命之後也。此氏人々。天長十年忠宗宿禰と云姓

を賜。ま大和國神別。尾張連。天。火明命子。天香山命之後也。は

と河内國。尾張連。火明命十四世孫。小豐命之後也。四字。天

と神別の。尾張連。火明命十四世孫。小豐命之後也。四字。天

と一とあり。けりて小豐命のこと。あどあ。けりて此氏をもせ

と。景行天皇。卷ふ委く見也。あどあ。けりて此氏をもせ

連。姓ふ。けりしを。次く。み多くは宿禰。姓を賜へ。其天武

三年の処。尾張連。賜姓。曰。宿禰。と見え。とるを始。免ふて。

統紀。大宝二年十一月の処。天平十九年二月の処。天平宝

字二年三月の処。神護景雲二年。○丹波國造。國造の事を

十二月。此処。あどみ見え。とゆ。○丹波國造。凡て成務天

皇。卷。○石作連。石作を和名抄ふ。山城國乙訓郡。石作以之

利。有ふ依て訓。はし。此を姓氏錄左京神別。ふ。石作連。火明命

六世孫。建眞利根命之後也。垂仁天皇。御世。奉為皇后。日葉

山城神別。石作

部。火明命之後也。ま津。圀神別。石作連、火明命六世孫。武椀根

命之後也。ほ和泉。石作連、火明命男。天香山命之後也。あ

ど有ふ依て記せ皇。あ不建真利根命の石棺を作れる事

○丹比連、和名抄ふ。河内、圀丹比比。郡と見え。履中天皇

紀ふ。多遲比と有ふ依て訓は。此を姓氏錄河内、圀。ふ。丹

比、連、火明命之後也。ま和泉。圀神別。丹比連、火明命男。天香山

命之後也。ま右京。丹比、宿禰、火明命三世孫。天忍男命之

男。武額赤命七世孫。御殿、宿禰男。色鳴、大鷦鷯、天皇御世。皇

子瑞齒別尊、誕生淡路宮之時。淡路、瑞井、水奉灌御湯。于時

虎杖花飛入御湯、瓮中色鳴、宿禰稱天神。壽詞奉號曰多治

比瑞齒別命、乃定多治比部。於諸圀為皇子。湯沐邑、即以色

鳴為宰令。領丹比部、戸因號丹比連為氏姓。と有ふ依て記

せ皇。あ不此事委くた。反正天。○禰多治比、宿禰姓氏錄河内。

別。圀神。ふ。禰多治比、宿禰、火明命十一世孫。殿諸足尼命之後

也。あ不決めて上の丹比、宿禰、條を。御殿、宿男。兄男庶。決て

上の丹比、宿禰、條を。色鳴、宿禰とある人。其心如女。故賜禰。

為御膳部。此人か。る事あ。居り。故を。皇次。

弟男庶。其心勇。健其。力足。制四十。千軍衆。故賜鞞。號四十。千

健彦因。負姓。鞞負。と有ふ依て記せ皇。○蝦壬部首姓氏。

錄大和。圀神別。ふ。蝦壬部首火明。命孫。天五百。原命。之後也。まと

津_四神別、蝮部、火明命十一世孫、蝮壬部犬手之後也。と有る依て記せり。蝮を多遲比と訓よとは、反正天皇の大御名此多遲比を。古事記よ此字を書れどあり。あむ此氏此事も、反正天皇、卷よ委く注ふ。○丹比周敷連、姓氏錄左京神別ふ。丹比須布火明命三世孫、天忍人男之後也。又云丹比連、火明命之後也。續紀天平寶字八年七月己酉、伊豫、因周敷郡人、多治比連、眞因等十人賜姓、周敷連。天平寶字八年、伊豫、因人大初位下周敷連、眞因等二十一人賜姓、周敷伊佐世利、宿禰、あど見也。まゝ式ふ。伊豫、因桑村郡周敷神社あり。ほと和名抄よ周敷郡あり。周敷神社を桑村郡ふ入るを思ふふ。此郡を桑村とり分りあるあゆべし。○津守連。

姓氏錄

攝津、因、神別

ふ。津守、火明命之後也。まゝ津守、宿禰、火明

命八世孫、大御日足尼之後也。

もと連、姓ありしを、天武天皇紀よ、十二月、津守

連賜姓、曰、宿禰とあり。

まゝ和泉、因、神別

津守、連、火明命、男、天香山命之後

也。とあるよ依て記せり。けり津とは、即攝津、因を云あり。

因号のとしハ仲哀天皇、卷二年此処よ云べし。

津守と云ふ由を、應神天皇紀

のふ。五百船悉集於庫水門。當此時置津守司と見えとる

よ就て按ふ。此時置れし津守司ハ、火明命の御裔ふて。其

を神功皇后の御世ふ。住吉神主と爲るひし。田裳見、宿

禰ふ。

或ハ其子孫よても。

兼て津を守りし、免給ひらむ。故津守連とを

負扱らむ。

和名抄よ、西成郡、免原郡よ、津守、郷も、あるハ、此氏人の住し里あるべし。

けり津守

てふ氏をイハ負るを。おれ始ハジメあるを。かの田裳見タシガミ宿禰スツメは。火明ヒアカ命ミコト八世ヤチノセ孫ムコ。大御日オホミカヒ足尼スツメとネり出デとる故ユヘふ。此コノ氏ウヂ姓ナリを大御日オホミカヒ足尼スツメ之後也ノチノミコト。とも有アルあらむ。侍サマて此人コノヒトを。天孫本紀アマノミコトノホノミふ。火明ヒアカ命ミコト八世ヤチノセ孫ムコ。倭得王ヤマトノミコ彦ヒコ命ミコト。亦モト云イハ市大シタ稻日イナヒ命ミコト。と有アルる人ヒトあるアルはくお布フ也ナリ。されど御稻ミイナのうウチ何ナニか。かくて火明ヒアカ命ミコト之後也ノチノミコト。と云イハ香山シヤマ命ミコト之後也ノチノミコト。と云イハ依ヨ之ノ其ソノ出自ミナトを記シされとる物モノあり。何ナニ姓ウヂ氏ナリもみあ
如此くあるを。とく心
 得て。姓氏録を見べし。
 第四十六段。まと神武天
 皇。卷。宇麻志麻遲命の処。ふ出デとるを見ミるルはし。

次天穗日命

夫ツギニ比ア命ミコト。出ホ兒ヒノ武ミコト。出ホ兒ヒノ武ミコト。

夷鳥命

亦ヒナ云マ天ラス夷ア鳥ヒナ命ミコト。亦ヒナ云マ天ラス夷ア鳥ヒナ命ミコト。

亦名武三熊命

熊クマ出クマ大ウ人シト。此コ。

者ハ。出雲イツ国モノ造クニノミヤツコ。出雲イツ臣モノ。土師ハニ連シノムラジ。菅スガ。

原ハラ宿禰ノスクネ。秋篠アキシノ宿禰ノスクネ。島津シマツ国クニノミヤツコ造ム。武

藏ガシノクニノミヤツコ国サガムノクニノミヤツコ造カホシマノクニノミヤツコ。大島オホシマ国クニノミヤツコ造ハ。伯

キノクニノミヤツコク、マノクニノミヤツコカミツウナカミノクニノミヤツコ
者[○]因[○]造[○]菊[○]麻[○]因[○]造[○]上[○]海[○]上[○]因[○]造[○]

シモツウナカミノクニノミヤツコア ハノクニノミヤツコイ ジムノクニノ
下[○]海[○]上[○]因[○]造[○]安[○]房[○]因[○]造[○]伊[○]甚[○]因[○]造[○]

ミヤツコニヒバリノクニノミヤツコタカノクニノミヤツコトヨクニノミヤツコフタ
造[○]新[○]治[○]因[○]造[○]高[○]因[○]造[○]豐[○]因[○]造[○]二

カタノクニノミヤツコラ ガ オヤナリ
方[○]因[○]造[○]等[○]出[○]祖[○]也[○]

武夷^{ヒナドリ}鳥^命御^名義^ハ師^ニ云^{天日照}とも申^比を思^ふ。此^神
天^とり降^りて邊^鄙を平^とす方^ひし功^{あり}也^て其^功の事^を御^下見^也

名^高れれ^ど其^功を美^て鄙^照と稱^しある^べし。照^を登^理
と云^る例

も万^葉十^四日^之照^者ち^て比^良鳥^とも云^は比^良を^比
を^比賀^刀礼^婆と^と免^り

那^の轉^れる^よて那^を良^とを横^通音^{あり}也^{。歎}辞^の阿^那を^阿
良^とい^ふも

此^例ち^て天^を阿^麻能^を訓^べし。其^を下^に舉^ぐる^阿麻^能
あり

比^奈等^理神^社ま^と竟^宴歌^ふ得^天穗^日命^{。學}生^蔭孫^矢田

部^宿禰^公望^作歌^ふ阿^磨能^寝臂^俄彌^農美^飫野^簸云^くと

ある^を以^て證^をば^し。○武^三熊^命武^三熊^之大^人三^熊也[。]

式^ふ出^雲因^意宇^郡ふ熊^野坐^神社^{あり}也^{。此}地^名ふ依^れる

御^名あり^也。さ^はを^彼地^名を^三熊^野と^も云^を思^ふべ^し。ま

と武^三熊^と云^を思^ふ。若^くを^其健^き残^美て稱^しふ^も

有べし。亦不此神の御名を多かるはと式よ。因幡、国高草

郡よ。天穗日命神社。お此御社の事天、日名鳥命神社。阿太

賀、大都健御熊命神社。賀、下の太字秘貞觀七年六月。因幡

国無位。阿太賀、都建御熊神、投從五位下。と国史ふ見也。ま

と式ふ。出雲、国出雲郡。阿麻能比奈等理神社あり。文徳天

皇紀よ。天安二年三月、此處ふ。在河内、国天夷鳥神、投從五

位下。ともあり。師云此神社を志紀郡道明寺村に在ると云

郷こきありと云ふ。ま道明寺ハ一名土師寺とも云り。即土師

録河内、国神別よ。出雲、臣あり。○出雲、国造、まお天穗日命

の。此葦原、中、国を言向ふ天降て。出雲よ久留坐於る由也。

下第百十四段。ふ見え。ま第百十六段。高皇産靈神の。經津主神し

て。大國主神、小勅、あるへる御言よ。汝之應、往天、日隅宮者

今當供造云々。又當主、汝之祭祀者。天穗日命也。とある。此

出雲、国造。ま崇神天皇の御代を云大社の神主とる起、あり。けて、国造本紀ふ。

都久怒定賜、国造。と見え。とれども、此時始て、此姓人の。国

造とあれ。ゆふは非也。此を兄を誅て、弟の家を、国造よ定

賜を云、るれる。ま六十年の処と。彼、卷。ふ云ふ。が如く。ふて。此姓

人の。お此、国造、まこは。皇美麻命。此。天降坐る時よ

とれる事也。上ふ引、る文。ふて明けし。書紀よ。天穗日命、是

出雲、臣等、祖也。ま左京神別と。姓氏録。よ。出雲、宿禰、天穗日命、子。

天夷鳥命之後也。此姓人の宿祢とありし證まゝ出雲臣

天穗日命五世孫久志和都命之後也。或人云出雲臣系國

命子津狹命子櫛厩前命子櫛形命とありとはと右京出

云り此よとく符り信友云月ハ日の誤り雲臣天穗日命十二世孫鵜濡淳命之後也。此命の事跡七

十年の処まゝ山城國出雲臣天穗日命子天日名鳥命之

小見也後也。まゝ出雲臣同天穗日命之後也。まゝ河内國神別出

雲臣天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也。おどあり

けり文武天皇紀ふ。大寶二年九月。從五位下出雲伯賜臣

姓とあり。此おの氏人よ臣姓を賜へることの紀了見え

る始あり。けり桓武天皇紀ふ。延曆十年九月。近衛將監

正六位下出雲臣祖人言臣等本系出自天穗日命十四世

孫曰野見宿禰野見宿禰之後土師氏人等或爲宿禰或賜

朝臣臣等同爲一祖之後獨漏拘養之仁伏望與彼宿禰之

族同預改姓之例於是賜姓宿禰とあり。其後まゝ朝臣小

爲しあり。朝臣姓を賜へることや史ふ漏とれど。結後師

紀七の二丁ハの三丁おどよ其人見えとり云抑此姓此もと臣此尸ありしも彼國をゆ上りて朝廷

小仕奉しとて始まき依れるはし。此姓人の始て京よ移

て仕奉しを垂仁の御世野見宿禰あり凡て臣の尸ある姓を朝廷よ

親く仕奉る輩れり。お此事後よくはしく云。けり後小

宿禰小も朝臣小もあまするれり。諸氏よ此さて然京此あ

るよ住るもはと國小住るも皆その本を國造とて出

るよ住るもはと國小住るも皆その本を國造とて出

るよ住るもはと國小住るも皆その本を國造とて出

るよ住るもはと國小住るも皆その本を國造とて出

るよ住るもはと國小住るも皆その本を國造とて出

と依子孫ある故ふ。古事記よは。其本ふ就て因造と何げ。
冷云。此史よ出雲因造と書紀ふハ。廣く渾て臣を擧と也。
記るハ。此ふ依れるあり。諸氏ふ此例多し。倣て知べし。
日。太政官符よ昔者因造と郡領と別ありしを。慶雲三年を也して。出雲因造よ。意宇
郡。大領を帶志まらるま。ま。旧例の如く。因造と郡領と
別よ任ぜられ。ちて今世は。因造此残れる也。此因を紀
しこと見也。因造のみふて。中よも此因造名高し。此二因造は。昔をり
他ふ異あ也。貞觀儀式よ。此を任也儀を載られと
也。○土師連。姓氏錄。山城因。土師宿禰。天穗日命十四世
孫。野見宿禰之後也。和泉因。神別よも二。はと津因。神別。土師連。天穗日命十二世孫。飯入根。命之後也。ま。大和因。神別。

ふ。土師宿禰。天穗日命十二世孫。可美韓飯根。命之後也。山城。神別よも。うく見也。と何也。さて飯入根。命。可美韓飯根。命ハ。同人ふ
て。崇神天皇。卷よ。飯入根。命ハ。宇迦都久怒。命の父あると
し見えぬれ也。野見宿禰。宇迦都久怒。命此子ありと也。
是よ。穗日。命十四世孫。ちて野見宿禰の。京よ移。て仕奉
と云こととく符へり。志。垂仁天皇。卷。七年の處ふ見えて。彼。當麻。速。て。人。と。争。力。し。
始あり。同御世。三十二年ふ。皇后比婆須比賣。命の薨坐る
時ふ。土師部を領て。土人形を造也。生人を殉ふよ更とめ
し處よ。天皇賞。稱野見宿禰之功。云く。任土部職。改本。姓謂
土師部。臣。是土師連等。主天皇。喪葬之縁也。其野見宿禰者。

土師部連之始祖也。とある此文。改本姓云くと云るは。出雲、因造と稱しを改免。土師部を領して。朝廷に親しく仕奉るに依て。土師部臣と負せ給へる由あり。但し始に野見宿禰一己に賜乎此臣を改て連とおまきあり。其に土師部を司れる故に。出雲氏あるを思ふべし。かくて此姓を稱らば。本は如く出雲氏に有るにむらじ。其に上桓武天皇紀十年九月、文の出雲臣祖人言ふ本系引る出、自野見宿禰と言、お、出雲氏あるを思ふべし。かくて後、此宿禰の正統とて出たる家と。此姓を稱するに依故に。上も舉たる如く。土師氏の多くありけむ。凡て諸姓多う依を、とく心けて此姓を。上も引る。垂仁天皇も、連を於て辨べし。けて此姓を。上も引る。垂仁天皇も、連

の尸ありしを。天武天皇紀十三年十二月の處に。土師連賜姓曰宿禰。とあるは。其本家お賜へるありけむ。凡ておかく状に見えたるは。皆その氏人の中におむれとある家にお賜へるにや。思われたり。其に此もし諸家も係御詔を承らましうば。宿禰を賜ふ御詔ありて後、連と稱ふる家にお有はむとくこそ。姓氏録も。同氏にして。尸の異なるが有は此故ぞ。此に姓氏録におかざらば。其本家は。姓氏録諸姓におよぶ事おまばとく心得て。其本家は。姓氏録にお載れる中にお孰れらむ定のとし。かくて次く。宿禰を賜へるにむら。其に稱徳天皇紀。神護景雲三年十二月の處にお。河内、因志紀郡、土師連智毛知賜姓宿禰と見え。姓氏録にお宿禰の尸ある家の四つあるを以て知べし。扱姓氏録にお河内此土師氏を載られざるを、餘因も移りしとてし。絶ち本家の儘に連尸にて。宿禰を賜はらぬも有けし。のば。姓氏録にお同土師氏あぐら。尸ハ連と宿禰の二

種あるなり。姓の事、雄略天皇、卷に見えたる。彼、凡布大和国神別、贊土師連と云ふあり。此ふべ。○菅原宿禰、右京神別。菅原朝臣、土師宿禰、同祖。

乾飯根命七世孫。大保度連之後也。とある。依て記せ。但し本書ハ朝臣とあるを。けて此姓を賜するを。宿禰と記るを。しむ下ふ云。

光仁天皇紀。天應元年六月。遠江介從五位下土師宿禰。古人云く。十五人言。土師之先。出自天穗日命。其十四世孫。

名曰野見宿禰。昔纏向珠城宮御宇天皇代云く。率土師三百餘人。自領取埴造諸物象。進之以代殉人云く。望請因居。

地名改土師。以為菅原姓。勅依請許之。と見也。古人の事。大介從五位下侍読天應元年賜菅原姓。菅原院以儒行。菅原被称世云く。弘仁十年正月十日薨。七十歳とあり。

は。大和国添下郡。ある地名。垂仁天皇陵のある地。あり。信友云。和名抄。ハ。此郷名。あれど。天平二十年の

法隆寺資財帳。添下郡菅原郷。を。あまむ。古ハ郷。あり。む。ま。と。後大和風土記。よ。も。此天皇を。此地。に。葬奉れ。

る事ハ。彼御卷の末。見え。たる。如く。みて。此地。ハ。土師氏。の。住。る。こ。と。也。ハ。野見宿禰。此。大御葬の。事。を。主。る。也。ハ。む。

グ。大御心。よ。か。あ。り。依。臣。あり。し。の。む。や。が。て。御陵の。邊。に。住。せ。給。ひ。ぬ。依。ぞ。始。あ。ゆ。む。然。ま。ハ。土師氏。多。る。中。

ふ。あ。の。菅原郷。に。住。る。グ。嫡家。にて。菅原姓。を。奏。請。と。依。遠。江。介。古人。宿禰。其家。あ。ゆ。む。か。ま。む。土師氏。の。嫡家。

は。菅原氏。ふ。ぞ。有。ぬ。依。け。て。神名式。ハ。此。添下郡。ハ。菅原神。

社あり。此を古の姓人此氏神あるべし。今菅原村と云ふ
在て菅原天神と
称ふと帳考ふ云ゆ。まゝ或説ふ。遠江国長上郡菅原郷に
今菅原天神社ありて。天神町と云ふ。こゝ古人の遠江介と
す。時の居地。後大和風土記に。添下郡菅原郷云く。傳云
あるくと云り。此地菅原氏始祖所出也。故以菅原爲氏也。とあり。地の事
也。垂仁天皇卷の末に。○秋篠宿禰。此を姓氏録に。上は菅
原朝臣の次に出で。同上とあり。はて此姓を賜へる事。
桓武天皇紀に。延暦元年五月。土師宿禰安人等言。臣等遠
祖野見宿禰云く。土師宿禰古人等。前年因居地名。改姓菅
原。當時安人任在遠國。不及預列。望請土師之字。改爲秋篠。
詔許之。於是安人兄弟男女六人。賜姓秋篠。とあり。此文の
趣を見

る。土師姓を改ま欲し。なるは。その稱此卑
く聞ゆる字忌てありけむと思はゆ。あり。はて菅原
姓。秋篠姓ともふ。土師姓ありし時と。宿禰の尸カネありし
うば。菅原姓。秋篠姓と爲ても。尸を本にゆ。宿禰よ
て有しを。そを上より引る文ども。改土師以爲菅原姓と
云。賜姓秋篠とのみ有て。尸を云ざるを思へし。
桓武天皇紀に。延暦九年十二月。菅原宿禰道長。秋篠宿禰
安人等。竝賜朝臣。と有て。是と。朝臣の尸とあま。し。れ
也。故この史にハ。本に就て。菅原宿
禰。秋篠宿禰と記せるあり。○嶋津国造。此に国造
本紀に。嶋津国造志賀高穴穗朝。出雲臣祖。佐比禰足尼孫。
出雲笠夜命。定賜国造。とある。依て記せば。はて嶋津国
とは。即志摩国これあり。此国の事を。第百四十一段。島
之速贄に。処に委く注へし。○

武藏^{ムサシ}因造。亦古事記書紀ノ依て記せ^レ也。因造本紀ノも、

出雲^{イセ}臣の裔ある由見え^ル。○相摸^{サガム}因造。亦古事記書紀ノ依て記せ^レ也。姓^{セイ}氏^シ録ニ入間^{イマ}宿祢^{シュクネ}と云も見ゆ。

紀^キ小^コ相武^{サキム}因造。志賀^{シカ}高穴穗^{タケアナホ}朝御世^{アサミヨノヨ}。武刺^{ムサシ}因造。祖神^{ソコノカミ}伊勢^{イセ}都^ツ

彦^{ヒコ}命^{ノミコト}三世孫^{ニヨリノミコト}。第武彦^{タケヒコ}命^{ノミコト}。定賜^{サダメ}因造。とある。小依りて記せ^レ也。

○大嶋^{オホシマ}因造。此古事記書紀ノ依て記せ^レ也。大嶋^{オホシマ}因造。志賀^{シカ}高穴穗^{タケアナホ}朝御世^{アサミヨノヨ}。

世^ヨ。无邪^{ムサシ}志^シ因造。同祖^{ドウソ}兄多毛^{ケタケ}比命^{ヒノミコト}。此命^{コノミコト}の名を延佳^{ノブキ}也。師^シも

り。上^{ウヘ}より引る文^{フミ}。第武彦^{タケヒコ}と云名^ナ。小對^{コタガヒ}とる名^ナ。亦れ^モ。かく訓^{ツケ}べし。兒^コ穴倭^{アナハ}古命^{コノミコト}。定賜^{サダメ}因造。と

ある。小依りて記せ^レ也。大嶋^{オホシマ}因造。とは和名抄ニ。周防^{スヘ}因造。大

嶋^{シマ}郡とある。此^{コノ}。伯耆^{ハクキ}因造。此古事記書紀ノ依て記せ^レ也。伯耆^{ハクキ}因造。志賀^{シカ}高穴穗^{タケアナホ}朝御世^{アサミヨノヨ}。

造^{ツクリ}。志賀^{シカ}高穴穗^{タケアナホ}朝御世^{アサミヨノヨ}。无邪^{ムサシ}志^シ因造。同祖^{ドウソ}兄多毛^{ケタケ}比命^{ヒノミコト}。大

八木^{ヤギ}足^{タラシ}尼^ニ定賜^{サダメ}因造。とある。小依りて記せ^レ也。○菊麻^{キクマ}因造。亦

は因造本紀ノ。菊麻^{キクマ}因造。志賀^{シカ}高穴穗^{タケアナホ}朝御代^{アサミヨノヨ}。无邪^{ムサシ}志^シ因造。

祖^ソ兄多毛^{ケタケ}比命^{ヒノミコト}。兒^コ大鹿^{オホカ}因造。直定^{ナオサダメ}賜^{サダメ}因造。とある。小依りて記せ^レ也。

也。ちて菊麻^{キクマ}因造。とは上總^{カミツマ}因市原^{イチハラ}郡^ノ。菊麻^{キクマ}久^ク郷^{キョウ}。亦ち

れ亦^モ也。○上海^{カミツマ}上^ノ因造。此古事記書紀ノ依て記せ^レ也。ちて上

海上^{ウミノ}。因造。とち和名抄ニ。上總^{カミツマ}因海上^ノ。加美^{カミ}郡とある。即ち

あり。右七^{ミナ}因造の事^{コト}。ま其^{ソノ}因造^ノとちの由^ユ縁^縁あり。○下海上^{シモウミノ}。

因造。此古事記書紀ノ依て記せ^レ也。因造本紀ノも。下海上^{シモウミノ}。因

直^{ナオ}定^{サダメ}賜^{サダメ}因造。とちり。ちて下海上^{シモウミノ}。因造。とは和名抄ニ。下總^{シモツマ}因

海上^{ウミノ}。加美^{カミ}郡とある。これ亦^モ也。○安房^{ヤナギ}因造。亦古事記書紀ノ依て記せ^レ也。

ふ。阿波^{阿波}因^因造^造志賀^{志賀}高穴穗^{高穴穗}朝御世^{朝御世}天穗日^{天穗日}命八世^{命八世}孫彌都侶^{孫彌都侶}岐命^{岐命}孫大伴直大瀧^{大伴直大瀧}定賜^{定賜}因造^{因造}とあるふ依て記せ也。阿波即安

房^房因^因造^造○伊甚^{伊甚}因造^{因造}才古事記^{才古事記}ふ依て記せ也。因造本紀も伊甚因造志賀^{志賀}高穴穗^{高穴穗}朝御世^{朝御世}安房^{安房}因造^{因造}祖伊許保止^{祖伊許保止}命孫伊己侶止直定賜^{命孫伊己侶止直定賜}因造^{因造}と見えたり。けて伊甚^{伊甚}因造^{因造}と

才和名抄^{才和名抄}よ。上總^{上總}因夷^{因夷}美^美郡^郡とあ係此^{とあ係此}也。○新治^{新治}因造^{因造}は。因造^{因造}本紀^{本紀}ふ。志賀^{志賀}高穴穗^{高穴穗}朝御世^{朝御世}美都呂岐^{美都呂岐}命兒^{命兒}比奈

羅布^{羅布}命定賜^{命定賜}因造^{因造}とある。美都呂岐^{美都呂岐}命天穗日^{命天穗日}命八世^{命八世}孫と見也。さて兒^兒字^字は裔^裔の義あり。即今^{即今}比常陸^{比常陸}因新治^{因新治}郡^郡あり。風土記^{風土記}云或曰^{或曰}倭武^{倭武}天皇^{天皇}孫

所遣^{所遣}因造^{因造}毘那良珠^{毘那良珠}命^命新令^令掘井^{掘井}云くとも見也。○高^高因造^{因造}才。此も因造^{因造}本紀^{本紀}ふ。志賀^{志賀}高穴穗^{高穴穗}朝御世^{朝御世}彌都侶^{彌都侶}岐命^{岐命}孫彌佐比^{孫彌佐比}命定賜^{命定賜}因造^{因造}とあ

也。今比常陸^{今比常陸}因多珂^{因多珂}郡^郡是あり。風土記^{風土記}云。古老^{古老}曰斯我^{曰斯我}高穴穗^{高穴穗}宮^宮大洲^{大洲}照臨^{照臨}天皇^{天皇}之世^{之世}以建御狹日^{以建御狹日}命^命任多珂^{任多珂}因造^{因造}今云

比^比命^命建御狹日^{建御狹日}命^命字^字ハ替れども本^本とり同人^{同人}あり。茲^茲人初^{人初}至^至歷驗^{至歷驗}地體^{地體}以爲^{以爲}峯險^{峯險}岳

崇^崇因^因名^名多珂^{多珂}之^之因^因。謂^謂建御狹日^{建御狹日}命^命者^者即^即出雲^{出雲}臣^臣同屬^{同屬}今多珂^{今多珂}自^自相摸^{相摸}因足柄^{因足柄}岳^岳坂^坂以東^{以東}諸縣^{諸縣}摠^摠稱^稱我^我姫^姫因^因是^是當時^{當時}不言^{不言}常

陸^陸唯^唯稱^稱新治^{新治}筑波^{筑波}茨城^{茨城}那賀^{那賀}久慈^{久慈}多珂^{多珂}因^因各遣^{各遣}造^造別^別令^令檢^檢其^其後^後至^至難波^{難波}長柄^{長柄}豐前^{豐前}大宮^{大宮}臨軒^{臨軒}天皇^{天皇}世^世遣^遣高向^{高向}臣^臣云々^{云々}等摠^摠領^領自^自坂^坂已^已東^東之^之因^因于^于時^時我^我姫^姫之^之道^道分^分為^為八^八因^因常陸^{常陸}因^因居^居其

二^二矣^矣とあり。新治^{新治}以下^{以下}六^六因^因の^のこ^こを^を因造^{因造}本紀^{本紀}と符^符へ也。○豐^豐因造^{因造}才^才は因造^{因造}本紀^{本紀}ふ。志賀^{志賀}高穴穗^{高穴穗}朝御代^{朝御代}伊甚^{伊甚}因造^{因造}同祖^{同祖}宇那^{宇那}足尼^{足尼}定賜^{定賜}因造^{因造}とあるふ依て記せ也。けて豐^豐因造^{因造}の事^{の事}才^才上^上第八^{第八}段^段ふ委^委く注^注め也。

此^此よ^よあ^あト^ト豐^豐因造^{因造}と云^云る^る才^才いま^{いま}と二^二因^因ふ^ふ分^分ら^らぬ^ぬ才^才の^の事^のあ^あま^まバ^バれ^れり。○二^二方^方因造^{因造}此^此も^も因造^{因造}

本紀よ。二方国造志賀高穴穗朝御世。出雲国造同祖。遷狛
一奴命孫美尼布命定賜国造。とあるに依て記せば。はて
二方国とを和名抄ふ。但馬国二方郡とあるこれ亦也。
安房以下六国ノ事。まゝ其国造とちノ事
も。成務天皇卷五年此処に委く注ふべし。
件上

次天津日子根命出兒天麻比

止都根命。亦云天目。亦名天久

斯麻比土都命。亦云天久。亦名

天出御影命。亦云天明立。亦名天

戸間見命。故是天津日子根命

者。犬上縣主。蒲生稻置菅田首。

桑名首。額田部連。額田部湯坐

連。三枝部造。高市縣主。奄智造。

凡河内国造。凡河内直津国造。

山背国造。山背直磐城国造。磐

瀬国造。菊多国造。周淮国造。馬

來田国造。師長国造。茨城国造。

周防国造等出祖也。

天麻比止都根命。天目一箇命。天久斯麻比土都命。御名義。

麻比止都。目一箇とも書る字此意ふて。此神を御目の

一扱坐ましけるお依傍し。伊勢の多度神社の枝社も坐

此神ありと申は。根を例の稱言お。故畧記てふ。小麻

比土都と耳も申せぬ。意よて日女島を天一根と云

る。とぐひの美稱うとも思へど。さる意あらむ。根

を畧記て云まじぬ。れむ。目一箇の意あるべし。○

天久斯麻比土都命。天久之比命。名義。久斯も久之比も同

言ふて。奇靈の意ある。と上ふ云。依が如し。○天之御影

命。明立天御影命。御名義。いまだ思得ざれど。但し明立を

我所見因云くとあるを考合はべし。此事委くハ其御天

戸間見命名の意戸を豊間見也味間見命の間見も同じ

其を下神武天皇卷ふ注べし。○犬上縣主を姓氏錄未定ふ。

犬上縣主天津彦根命之後也。とあるふ依て記せり。但し天津

彦根命之後と云々其本ふ就て舉るるもけりて犬上を和

名抄ふ近江因犬上郡をぬれぬ。天武天皇紀ふ犬上川濱

見え。江左三郡録と云ものよ今の万葉十一。狗上之鳥

籠山と云も見也。聖武天皇紀もさて神名式も同因野

洲郡も御上神社名神大月あり。此御社ハ即天之御影神

ふ坐ませ也。此御社の事を天此因ふ彦根と云處あ

る野洲郡ありて安河と云川のあるかど悉く天津日子

根命ふ由縁ある事なり。○蒲生稻置此古事記ふ師云

和名抄も近江因蒲生加万郡これあり名義をいと上代

ふ蒲の多く生ぬりし地ありしよや。蓬生浅茅生麻生お

智天皇紀ふ此郡名見え万葉一。蒲生野と云るを此か

とも云昔より廣大ふして近因ふ双あき野山あり此姓の

あとを他書も未見あたらげ神名式も近江因蒲生郡も

菅田神社ありて。今云此御社を今桐原村と云よ在と帳

姓氏録も菅田首天久斯麻比止都命之後也とあり。

止都命を天津彦根命の○菅田首は姓氏錄山城因ふ。

菅田、首天、久斯麻比土都、命之後也。とあるふ依て記せぬ。
近江、因蒲生郡、菅田神社ありて。桐原と云地に坐まし。
其を麻比土都、命あるはきまよと。上ふ注せる如くあれぬ。
菅田と云を。桐原の舊名ふて。其をやがて氏に負て山城
ふ移住るあるべし。諸氏に然る例いと多う也。式に。播磨、因加茂郡に
も。菅田神社あり。此御社を、今賀東郡菅田村と云に在り。
郷あはれを由。帳考ふ云り。まよ和名抄に。此郡に。川内、
何るべし。はと。同因多可郡に。天目一神社もあり。まよ
郡に。天一神王神社と申はもあり。此も目一箇、命に由あり。
りておぢ也。此社を、今東新宿村と云に在り。阿布良権現
と称ふは。此う。此も近江とて移せるあるべし。其を郡名
を多可と云を。彼因ある多何神社に由有てたぢ也まば

あり。○桑名、首。此を姓氏録右京神別に。桑名、首、天津彦根、命、男。

天、久之比乃命之後也。とあるふ依て記せし。桑名を和名
抄に。伊勢、因桑名、久波奈郡、あれあり。式に同郡に。桑名、神社

二座。此を天津日子根、命と。天、久之比乃命を祀れしとぞ。

まよ天野信景が。伊勢参道里程抄と云ものよ。今桑名、町
小ある春日、社に。即、式の桑名、神社あり。社家、説ふ。社内左
を。三崎、神社と号は。昔を太夫村に在り。後、了此に。移は。今
も。太夫村に。神輿昇人出るあり。建雷、命、斎主、神、右を春
日、神社に。て。児屋根、命、姫大神に。奥の御前を。母山、神社
と称して。地主の神祕あること。祠官郷、司氏に。聞りと云
此説に。地主と云る。彦根、命、久之比、命、小坐、あるべし。ま
よ。或説ふ。大夫村に在り。三島明神、即桑名、神社に。りとも
云。あぢを。く。同郡に。多度、神社も有て。此を上ふ云。依如く。
尋ぬべし。

天津日子根、命、小坐まし。桑名、城より三里、戊亥の方、多度
村と云り坐はあり。まよ同郡に。

額田神社も何也。此も由あること上よ云り。此御社の傍ふ。俗に一目連と稱は社あり。此を社傳ふ。天麻比止都禰神ありと云。信ふ然るべし。天野信景ハ多度神社を以て。多度命ありとせるを委うらび。はと桑名神社ふ竝て。式ふ佐乃富神社あり。此も目一箇命ふ由あると。景行天皇卷よ注べし。けて久斯麻比土都命の御裔の桑名地ふ住て。地名をやがて姓ふ負る。後よ右京よ移て住るよぞ有べき。はと古語拾遺よ。天目一箇命。筑紫伊祖也。と見えとる。伊勢國忌部を。此桑名首を云るふは。何らざゆ。まる筑紫忌部を更ふ考得。筑前國早良郡ふ額田郷何也。おまもし由ありよや。後人考考てと。岡田勝海云。肥

後國山鹿郡久原村と云。処よ。一目神社と云。古社何也。神主帆足下総守清原惟香と云。故翁門人ありと云。り。由あり。げあり。○國造本紀よ。天一目命とあり。延佳。○額田其を誤ありと云て。目一と書るを中くふ。○額田部連。此を書紀ふ。天津彦根命。此額田部連遠祖也。姓氏錄左京ふ。額田部天津彦根命三世孫。三世二字を私み加と神別。額田部三世孫。其を本書額田部河田連條よ三世字あり。まよ高市連の処よ引る文。彦伊賀都命とあるも同人と聞えとる。其処ふも三世孫とあり。意富伊我都命之後也。おど何ゆみ依て記せ。但天津彦根命と云るを。其本を奉よゆ。て。実を天御蔭命とゆ。出よるを。下よ引る文。見え。如し。けて意富伊賀都命ハ彦根命の三世孫。ちて額田と云。由は。次ふおま。バ御蔭命よ孫あり。り。引る文。ふ見也。○額田部湯坐連。古事記よ。か師云。姓氏錄左京ふ。額田部湯坐連。天津彦根命子。明立天御影命之後神別。

也。今云旧事紀よ天斗麻弥命の後ある由云るハ御兄弟の間傳の混るぬり。允恭天皇御世被遣薩摩國平隼人覆奏之日獻御馬一疋額有町形廻毛ヨロシキテ天皇喜之賜姓額田部也トキ奴加を即比多比のことあり町毛ハ和名抄よ。是よて額田ハ義解えとり。定額の田ハ義都無之とあり。非あり定額の額を奴加と云べき由あり。まと同書河内國額田部湯坐連。天津彦根命五世孫平田部連之後也。今云允恭世よ額田馬を献れるを古の平田部連とり。幾代の孫ありハ此は考ふべき由あり。ちて湯坐の事を垂仁天皇卷五年ニ注べし。此を由邪と訓む。ちて右此如く。額田部連ともあまむ。此湯坐連を其氏人此中よ湯坐の事此由よ付て別よ賜をせし姓あるべし。さ

て後よ湯坐連の方榮えて廣うけける故よ古事記よは其を舉アゲ此姓此人を孝徳紀孝謙紀仁明紀あども見書紀よを本を舉とるハ流べし。ちて顯宗天皇卷よ倭國山邊郡額田邑和名抄よ平群郡額田奴加多。今此郡よ額田部と云村あり是ハ河内國河内郡額田とあり。されらは姓氏録の説此如くは。此姓とり出とる地名よ。凡て姓まよ人名とり出とる姓人の名。まよ神名式よ伊勢國桑名郡額田神社あり。今云和名抄よ衆名郡額田沼加多と見え神鳳抄り。と帳考。同郡多度神をよ此天津日子根命おれバ。此社も此姓よ由あるべし。○三枝部造サキヅノ古事記よ姓氏録

大和國ノ三枝部連額田部湯坐連同祖天津彦根命十四世孫建己呂命之後也。顯宗天皇御世諸氏賜饗醢于時宮庭有^ニ三莖草獻之^ヲ因賜姓^ス三枝部造^ト。姓有^テ左京神別ノ也。此と何^レ也。天武天皇紀云。十二年九月福草部造賜姓曰連。之見え^ル也。然^ルも此^ノ造と何^レ也。本^ノ就^キて舉^ルる也。武。さて三枝部のことと、神武天皇卷云。三枝部のことと、顯宗天皇卷三年の所委く注ふべし。○高市縣主。此は古事記云。姓氏錄右京神別云。高市連額田部同祖天津彦根命三世孫彦伊賀都命之後也。此を上引る文も。ると同人あるべき。はと和泉國高市縣主天津彦根命十世孫建己呂命之後也。彦伊賀都命十世孫當る。之見え。さて高市

は和名抄云。大和國高市多介知郡あり也。此名の事也。雄の御哥も多氣知と何^レ也。下。天武天皇紀云。高市郡大領高市縣主許梅と云人あり。同卷云。十二年冬十月高市縣主賜姓曰連。之見え也。○奄智造也。古事記云。依師云。奄知也。阿牟知と訓べし。和名抄云。伊勢國郡も奄藝。今山邊郡も庵治云。村あり。此あるは。今あうぢと唱ふる也。伊勢の郡と何^レりて。哥も扇もと。ま^と靈異記云。大倭國十市郡菴知部と云何^レ也。續紀廿五。はと卅六。豊野。さて姓氏錄大和國神云。奄知造天津彦根命十四世孫建疑命之後也。ま^と左京神。奄知造額田部湯坐同祖と何^レ也。類聚國史弘仁十年二月叙位云。奄

知造吉備麻呂 ○凡河内国造。此を古事記より依て記せり。けして凡河内、
と云、人見也。国号のおと及此氏人の国造とあ
凡河内直。此を書紀より天津彦根命、是凡河内直、
祖也。と見え。舊事紀より天御蔭命、凡河内直等祖とあり。然
れ
む此姓を日子根命の御子の中より。毛と直の尸外にけし。茂
天御蔭命より出るとありなり。天武天皇紀より十二年九月。凡川内直賜姓曰連と見え。ほ
と十四年六月。凡川内連賜姓曰忌寸とあり。師云此氏人
宿祢と云姓を賜しこと。続後紀一故姓氏録より此姓三
所津神別。小出とあり。何れも忌寸とあり。但し津国神別より
日命十三世孫可美乾飯根命之後也。けして古事記より凡河
と一処あるを決て混ちる傳あらむ。

内国造とあるは。国造とある後を以て擧げ。書紀より凡
河内直とあり。姓の本に就て擧るとあり。其を此氏人の
造とあるは。成務天皇の大御世に定給へ。○津国造。姓
氏録。天津彦根命。男。天戸間見命之後也。と
見也。○山背国造。古事記より依て記せり。但し本より代とあ
るを省く。○山背八郎山城公。名義を師説より山背と書る字の意
を省く。○延暦十三年十一月。詔より此国山河襟帯自然作城
因斯形勝可制新號。宜改山背国爲山城国。云々。紀畧より
見也。けして書紀より天津彦根命。是山背直祖也とあり。もを

直比加婆禰おせしを。天武紀ふ。十二年九月。山背直賜姓。日連十四年六月。山背連賜姓。日忌寸とあり。姓氏錄山城國神別。山背忌寸。天都比古禰命子。天麻比止都禰命之後也。と見也。今云國造本紀初の処。檀原朝御世。以天目一命。命為山代國造。即山代直祖とあるを誤なり。其を姓氏錄。天麻比止都禰命之後也。と云ふ。時代續紀。のいとく違へるを思ふべし。おち下よ云を見も。續紀。山背國造。山背忌寸品遲と云人見也。續後紀。天長十年。山城國入。山代忌寸淨足。同姓五百川等八人。改忌寸賜宿禰。淨足等。天津彦根命之苗裔也と見也。やあり。けて姓氏錄津國神別。山直。天御影命十一世孫。山代根子之後也。と見えと依て。書紀。天津彦根命。山背直祖也。と有と合せて

思ふ。此を山代直あるが。代字此脱と依あり。其を山代根子てふ名も。彼國よ由ある名あるをや。斯てまこと上引る。山背忌寸條。天都比古禰命子。天麻比止都禰命。と何依を以て見れ。天麻比止都禰命。天御影命と。一神あると明けし。此を師も既に然言れりき。おち思ひ證はべき事の多加依。次くふ云ふを見る。後紀。承和六年十一月。左京人山直池作等十人。改直賜宿禰。池作之先。自天穗日命之後。とある。姓氏錄和泉國神別。山直。天穗日命十七世云。とある。姓。別姓あり。或人おまを引て。津國神別。見元と依。天御影命と。額田部。湯坐。連。條。天津彦根命子。明立。天御影命。とある。と云へまど非あり。此を明立。てふことの無き。依て。れ。は。れ。正しく。明立。天御影命。のおを。古事記。も。舊。○磐城國造。ては國事紀。も。多。天御影命。とある。や。

造本紀よ。石城、圀造、志賀、高穴穗、朝、御世。以、建許呂、命、定、賜、
圀造とあるに依て記せ也。建許呂、命、天津彦根、命、十四世、孫、あること、上、よ、引、る、姓、氏、
録よ。磐城、丸、和名抄よ。陸奥、圀磐城、郡、とあるよきあり。○
磐瀨、圀造、よは、圀造本紀よ。石瀨、圀造、志賀、高穴穗、朝、御世、
以、建許呂、命、兒、建彌、依米、命、定、賜、圀造とあるに依て記せ
也。磐瀨、丸、和名抄よ。陸奥、圀磐瀨、郡、とあり。此二圀の事
卷よ、委く、注べし。○菊多、圀造、こは、圀造本紀よ。道、奥、菊多、圀造、輕
島、豐明、御代、以、建許呂、命、兒、屋主、乃、禰、定、賜、圀造とあるに
依て記せ也。菊多、和名抄よ。陸奥、圀菊多、郡、これあり。此圀
丸、應神天皇、卷よ、委く、注べし。は、て、建許呂、命、丸、も、や、近江、に、住、り、し、を、召

まて、道、奥、に、任、され、し、を、所、思、く、て、彼、圀、よ、由、縁、有、る、事、と
も、此、彼、あり、其、丸、ま、於、神、名、式、よ。陸奥、圀名、取、郡、多可、神社。
宮城、郡、多賀、神社。和名抄よ、多行方、郡、多珂、神社、和名抄よ、賀、郷、も、あり。
丸、あ、る、丸、決、く、近江、圀犬、上、郡、よ、坐、ま、り、多何、神社、を、移、し
齋、へ、る、丸、ゆ、べ、く、は、と、名、神、祭、式、よ。川田、神社、二座、御上、神
社、一座、と、見、え、と、る、共、に、近江、圀、に、在、る、社、ふ、て、中、よ、も、御
上、神社、丸、天、之、御、影、命、に、坐、て、此、姓、人、の、祖、神、有、る、こと、上
ふ、云、る、如、く、あ、ま、り、彼、圀、に、移、り、住、て、後、も、祭、る、は、き、謂、ふ
也。然、る、に、神、名、帳、よ、此、二、社、の、名、此、見、え、ざ、る、丸、移、り、て、後、
彼、圀、の、名、神、の、社、よ、決、て、此、二、社、有、る、は、き、然、る、例、常、の、こと、あり、
丸、本、此、稱、を、以、て、祭、ら、れ、し、が、其、ま、り、傳、ハ、ま、る、あ、ら

む然るを或写本此二社を奉ざはたさる本の由縁を辨へざる後世人の此を近江に在る神社名あるを以て陸奥國の名神と載するを誤あるべく思ひてさあしらす除けるは依はし。 けて道奥を猛き夷ども此仇仇をむ困困は依故ふ其を鎮鎮免むとの御心よて。建許呂命を任し給へるは依べし。此命は雄雄くし加ゆけむこそ建許呂と云ふて炳炳くはと下ふ引る風土記の傳此趣ふても息長帶比賣命オキナガタビメふ仕奉れと云は彼韓を征ウチふイデ幸行せる時イデ。從牙給へるを云りや聞ゆまをふ。ま按此困の伊達郡も建の意あらむも知べのらに建を多氏と云ふ五十猛神を伊楯神と云ひ建部を多氏部と云を思ふべし。○周淮困造スネノミ。おて困造本紀ふ須惠困造志賀高穴穗朝茨城困造祖建許侶命兒大布日意彌命定賜困造と

あるふ依て記せ。周淮を和名抄ふ。上總困周淮郡されあ。同書よ此郡よ額田郷湯坐郷津別。けて姓氏錄津別ふ末も見ゆ由ある事あるべし。使主天津彦根命子彦稻勝命之後也。末字本ふ未と作るを内山氏が末の誤りと云ふぞとき一本まご拾芥抄抄よ米とあるも誤字あるべし。と見えあるを由有げあ。但し彦稻勝命を日子根命の御子を申は外ふ所見とる事ハ。いせおおちらハ。此を彦伊賀都命を訛ハて。天津彦根神の御子と爲とるふは非ざはら。彦伊賀都命を天津彦根命三世孫あるこそ高市縣主の処よ引る姓氏録の文不見也。○馬來田困造ウマノタノミ。おて古依て記依。師云和名抄抄よ上總困望多多。郡とあ。て。万葉十四上總困歌ふ宇麻具多能禰呂とを免る地あり。末宇多

ハ後よ訛シ書紀廿八ふ。大伴連馬來田といふ人名を。九卷ふ。望多ウミダと作シ。宇麻具多ウマキタと唱へしこそ知レ。繼體天皇の御子。馬來田皇女を申去も有シ。見レ也。造本紀。馬來田。圀造。志賀。高穴穗。朝御世。茨城。圀造。祖。建。許呂。命。兒。淡河。意彌。命。定。賜。圀造。○師長。圀造。此。圀造。本。紀。師長。圀造。志賀。高穴穗。朝御世。茨城。圀造。祖。建。許呂。命。兒。意。富。鷲。意。彌。命。定。賜。圀造。とあるよ依て記せシ。師長。圀。和。名。抄。ふ。相。摸。圀。餘。綾。郡。磯。長。郷。う。や。度。會。延。經。が。言。は。は。さ。る。ふ。と。れ。○茨城。圀造。お。書。紀。ふ。天。津。彦。根。命。此。茨城。圀造。遠。祖。也。とあるよ依て記せシ。別レ。氏。錄。和。泉。圀。神。別。も。茨。木。造。天。

津彦根命之ウツラキ茨城。和名抄。常陸。圀茨城。良岐。郡。これ。後也。と見也。師云。和名抄。牟婆良岐とあり。本。宇婆良。ある。此。後。牟。と。を。後。ハ。牟。米。牟。麻。と。云。と。ひ。よ。て。宇波良とあり。を云れし。依て。宇婆良。伎。と訓。於。常陸。風土記。茨城。圀造。祖。多。邠。許呂。命。仕。息。長。帶。比。賣。天。皇。之。朝。當。至。品。太。天。皇。之。誕。時。多。邠。許呂。命。有。子。八。人。中。男。筑。波。使。主。茨城。郡。陽。生。連。等。之。祖。と。見。え。圀造。本。紀。ふ。茨城。圀造。輕。嶋。豐。明。朝。御。世。天。津。彦。根。命。孫。筑。紫。刀。禰。定。賜。圀造。と。の。を。合。せ。て。思。ふ。よ。筑。紫。刀。禰。多。邠。許呂。命。の。子。ふ。て。風。土。記。ふ。筑。波。使。主。と。ある。と。同。人。を。聞。え。と。云。さ。て。風。土。記。云。く。と。云。る。よ。依。て。思。ふ。よ。圀造。本。紀。ふ。筑。紫。刀。禰。と。ある。ハ。筑。波。刀。禰。を。誤。れ。る。よ。と。も。思。へ。ど。古。語。拾。遺。も。天。目。

一箇命筑紫忌部といふ事の有れば筑波を誤れるは
よむ非交かよくよ筑紫を負ふことはいふらる。ちて
三代實録ふ。仁和三年三月常陸国正六位上菅田神從五
位上と見え。和名抄ふ。同国河内郡ふ菅田郷あり。然れど
菅田神ハ茨城国造の祖神と記まる。みぞ有べきはと郡
名を河内と云も。凡河内直より分けて。此地の国造とあ
れる由縁あるは。あふ茨城郡の事。應神天
皇卷よ委く注ふを見べし。○周防国
造。此古事記ふ。周防国造輕嶋豐明朝。茨城国造同祖。加
米乃意美定賜国造とあり。此国の熊毛郡よ石城神社と
造ありしふ由あり。云あり。彼建許呂命の石城国
造ありしふ由あり。○右件く見えし。稻置直縣主首連。
臣国造あどの尸事。此取總て言むと。其をまら

稻置^{イナキ}。ま^{イナキ}と稻寸とも書り。置は於伎の於を省て取れり。
日置^{ヒキ}王置あどの例あり。但し此字多書く由あり。下
ふもとハ職號^{シヨク}ハ^{シヨク}シグ姓^{カネ}ふあまゆしあり。其を成務天
皇卷^{ニシ}の五年^{ニシ}ふ。縣邑置^{シヨク}稻置^{イナキ}とあり。此稱の史よ見えし。
始^{ハジ}ふて。名義ハ彼處ふ云如く。諸国ふあり。屯倉^{ツナクラ}。此を稻を
積置^{ツキヅ}所あり。あんと垂仁天皇卷^{ニシ}七。此司をして。其事ふあはる。謂
ふ依て。稻君と云意ハ稱あるは。其意を得て。稻とは書依
れらむ。師も既に置^{イナキ}を君あり。○直^{ナオ}は。師説ふ。書紀よ。阿多
比延^{ヒニ}と訓る所あり。皇極天皇の卷。和名抄。和泉国和泉
郡の郷ふ山直^{ヤマナオ}也。末^ハ倍^ハ也。あつるを合せて。阿多閉^{アマタヘ}と訓べし。
か。阿多比延の比延を切めて。閉と云あり。山直^{ヤマナオ}は。ちて此
を山の末よ。阿韻^{アリン}ある故。阿を畧きて多閉あり。ちて此

尸も凡て圀く此處くふある姓ふ附とれむ。其處の君と
る意ふては有あり。とあり。今云姓氏録よ直者謂君也と
詔了就て注せる文あまども。けて名義を。師ハいまど考
意を師説よとく加れへり。うと。試み直兄ふはあらけり。大兄少兄あどの例は稱
云と。とぼくりを師も。其を常言ふ。物の替を出はあを阿多
比をもれ。外ど云を按よ。天皇命は御手ふ代て。地を治
むる由ふて。直兄と稱る。係號れし。尸をは爲れるあ
らむ。續紀廿八よ。庚午年。籍ふ直。姓よ。費字を書きとり
故あらむも。有し由見え。るも。言義の代。の意ある
與とも義通ふ。あり。○縣主は。其縣く。此主れ。縣のお
とは。成務天皇卷五年。ふ出。其處ふ云。は。けて此め。圀

圀ふ在る縣を掌る者れ號れしを。其職を子孫世くふ
傳る故ふ。即某縣主と云。尸をありしれ。○首を。師云。意
毘登を訓べし。元明紀よ。大津連意毘登と云。人名を。元正
も。忌部首。讀於。此はも。尊稱ふて。大人の意あるべし。首
比止とあり。意宇登をよむ。音。と言。ま。し。を。然る。あ。と。ふ。て。尊。み。て。人
を。意。毘。登。と。云。し。大。お。は。允。恭。天。皇。卷。ふ。首。也。余。不。忘。と。言
る。あ。と。れ。あ。る。此。正。し。き。證。あ。り。け。て。此。尸。も。忌。部。首。物。部。
首。海。部。首。形。部。首。鷄。甘。部。首。外。ど。の。と。ぐ。ひ。某。部。と。云。姓。ふ
多く。は。部。と。云。ぬ。も。多。く。は。部。れ。有。る。べ。き。諸。姓。よ。負。る
を。思。ふ。よ。其。部。を。統。領。る。首。と。云。義。の。尸。あ。り。然。れ。を。桑。名。

首を古語拾遺ふ。天目一箇命者。伊勢国忌部祖。と云る。我
合せて思ふ。麻比止都禰命の御裔也。鍛冶部を統領り
て桑名小在し。伊勢国忌部とも。桑名首とも。云し。あら
む。○連を師云。牟良自と訓む。群主の意。其群の中
此主と云意あり。段津守連の処に注りき。ちる大抵諸此
姓の中。臣と連とは。京此何と。住居て。殊小親く朝
廷よ仕奉る氏。此尸あり。雄略紀遺詔。臣連伴造。毎日
るも。臣連伴造を。京近く住居故あり。○今云。古書。凡て
臣連と序て。大臣と大連と並とるも。自ら小大臣を高く
大連をいさく。下れる状あり。○臣を意美と訓む。ちて意
見也。まば。此よ奉るあり。師説。大身の意。此を朝廷よ仕奉る
美てふ言義也。人を僚よ。等み云。称あり。朝廷よ仕奉る

人あるを以て。臣字を書。あまど。君よ對へて云。臣の意。よ
そ。何ら。君よ對へて云。ふ。臣を。夜都古と云て。書紀。あど
小も。然訓りと。書紀。其不。古書。ふ。い。ち。も。臣連と對へ云
言。ま。た。れ。ぞ。 伴男を持。分。く。連を。群主の意。よて。其群の中。此主と
て。云。意。あ。い。や。我。合。て。思。ふ。よ。大持。て。ふ。言。此。約。ま。依。よ。て。知
を。美。と。も。と。は。部。を。統。持。た。意。の。稱。號。れ。し。ぐ。尸。を。あ。ま
切。ま。る。る。あ。ら。む。此。を。前。よ。思。へ。し。て。意。美。て。ふ。言。義。を。右。よ。云
る。あ。ら。む。此。を。前。よ。思。へ。し。て。意。美。て。ふ。言。義。を。右。よ。云
号。あ。ら。む。其。を。上。よ。引。る。天。神。の。大。國。主。神。小。勅。給。へ。依。大
詔。命。小。當。主。汝。祭。祀。者。天。穗。日。命。是。也。と。有。て。こ。ま。出。雲。國。
造。ま。と。大。社。の。神。主。と。起。る。と。中。臣。の。中。取。持。て。ふ。言
の。約。れ。依。あ。る。と。を。合。せ。て。按。ふ。小。穗。日。命。以。來。其。の。御。裔
此。大。社。の。神。主。と。して。大。社。の。神。此。御。前。の。事。執。持。て。仕。奉
る。職。業。あ。る。を。以。て。大。持。と。稱。し。り。ら。む。意。美。と。約。り。て
尸。と。れ。り。是。を。移。り。て。餘。氏。人。小。も。稱。ふ。あ。と。く。あ。ま。る
れ。ら。む。と。思。ひ。ま。と。意。美。を。大。主。の。約。れ。る。よ。て。奴。斯。を。迹

と約まれども、三ムメセ、ナニヌネと云、口云、まふま
み、自ら通ふ言ひて、迹と美を、任部を美夫といふ、ま
ひの通ふ例も、何り、まよ世も、人を御主と云ひ、御身と
いふ、同く、布の言、たひ、言、本を細く、云へ、む、一
意、滞る、謂、め、有、り、は、臣、使、主、と、書、る、も、由、有、げ、あり、
然、れ、ど、此、も、と、大、社、小、仕、奉、る、大、主、の、意、此、稱、号、あり、
む、が、廣、く、餘、の、氏、も、い、ふ、言、と、あ、ま、る、あ、ら、む、れ、ど、種
種、小、思、ひ、と、り、し、た、皆、こ、ろ、う、正、き、は、て、中、臣、の、中、執、持、あ
る、由、も、書、と、し、ハ、安、康、天、皇、卷、小、委、く、注、べ、し、
主、と、も、書、と、し、ハ、安、康、天、皇、卷、小、委、く、注、べ、し、
師、説、み、何、き、も、久、邇、能、美、夜、都、古、と、訓、ば、し、其、由、を、ま、た、上、
代、小、諸、仕、奉、人、等、を、總、舉、る、よ、は、臣、連、伴、造、国、造、と、並、云、也、
書、紀、卷、く、よ、數、ま、多、敏、達、卷、小、臣、連、二、造、と、も、有、て、二、造、者
あ、ら、び、多、し、
国、造、伴、造、也、と、注、せ、也、扱、そ、の、国、造、を、諸、国、小、て、其、国、の、上
と、し、て、各、其、国、を、治、る、人、を、云、尸、あり、
皇、卷、五、年、の、処、了、見

え、と、れ、ど、其、処、よ、伴、造、の、伴、を、云、二、枝、部、あ、ど、の、部、あ
委、く、云、を、見、べ、し、
ゆ、今、云、石、作、部、丹、比、部、土、師、部、額、田、部、あ、ど、此、外、部、を、即、牟
禮、の、約、也、と、る、言、れ、る、を、米、小、通、ハ、し、て、言、れ、ら、牙、依、言、れ
也、上、達、部、と、書、て、か、ム、タ、チ、故、造、の、尸、は、多、く、を、某、部、と、云
也、と、訓、む、類、を、思、ふ、べ、し、
姓、小、多、し、天、武、紀、十、二、年、九、月、此、処、を、見、べ、し、○、今、云、あ、を
其、外、の、尸、を、負、る、も、多、う、ゆ、其、を、上、小、見、え、と、る、石、作、部、丹
比、部、土、師、部、額、田、部、あ、ど、の、諸、氏、此、連、あ、る、を、思、へ、し、さ、て
其、部、を、摠、て、伴、造、を、云、り、其、を、伴、造、と、云、其、伴、を、領、司、さ、て
御、臣、と、云、義、あ、ま、バ、あ、也、然、る、を、或、人、此、伴、造、と、云、を、引、連、
祢、て、姓、と、云、心、得、部、と、云、也、其、意、れ、る、姓、あ、也、今、云、部、と、云、
て、言、ひ、説、を、非、也、
造、工、造、佐、伯、造、酒、人、造、衣、縫、造、あ、ど、の、類、部、
と、ハ、云、祢、と、部、あ、る、氏、ぞ、と、云、ふ、意、あり、
諸、部、小、て、上、と、し、て、各、其、部、を、掌、る、人、を、云、尸、れ、也、垂、仁、紀
部、

君の屋子親く侍仕ふる子と云義ふて。世も家子君を
親れ意ふ取て。臣をひろく言するあ也。或説小夜都古の
古附予れ意よて君よ附る子の義れり。附を都とのみ云
るを体言ありとて。因造字クニハツコ。伴造字トモハツ
コと訓て師のクニノミヤツコトモノ三ヤツコと訓れ
しを非と云まど却りて非説あり。此を書紀よ稀も因造
も因之子の意とせむ所もあると云ふ。前ふた此クニツコ此
訓ふ依て。因造を亦都古と訓み伴造ハ登母能美夜都
古と訓べし。其ハ宮之子。因造之子といひ。因造を伴造
大御許ふ在て。親く仕奉まむ。宮之子といひ。因造を各
云。あむと親へ大御許し。師言ふ。書紀ハ因造を伴造並
ば云。まどあれを二造もあると云ふ。一を三ヤツコ一を
バ多ツコと訓の変わるべき由れきやと云。扱まと宮
れし説の然ることあまむ。此考立グとし。扱まと宮
能賣てふあとの有て。大殿祭の詞別文まと姓氏録の古

語拾遺小。今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悅懌也と
あると。古は男を廣く云言ふ協とを合せて按ふ。美夜都
古。美夜能賣と對とる稱ふて。即宮之子宮 共子大宮内ふ
侍仕了て。天皇や人草との中よ立て。事を掌る故子。男を
宮之子。女を宮之女と云るとり轉じて。美夜都古と云稱
の廣くありて。君ふ對へて。臣を云名とハ爲れるあらむ。
此も前よ。姓氏録の神宮部造の故事よ思ひ合せて。凡
て美夜都古といふ言を。出雲因造此神宮ふ仕奉協とり
出とる名よて。因宮之子。此義あるべし。神子仕奉るを
夜都古と云ふ。津因神別子。神奴連といふ姓のあると。
まど巫多加牟能古といふ。あどを思ふべし。扱是とり
諸因の因造をも。久尔能美夜都古と云ふ。こを起れ。あ
らむと。思へりし。うど此を大君の宮之子と。り移る。あ
らむと。考のかとぞ宜るべき。師云。まと宮奴を美夜

都古と云ハ別あり。其たもと私家の奴婢を云あり。されどその私家に奴婢も君臣に臣に意なき云。もておけど本をちて造字を書く所由を。師を未思得と云おけ。一あり。ちて造字を書く所由を。師を未思得と云おけ。大圀主神を。圀造大名牟遲神。或圀作と。せも稱して。此は圀造正坐るとしの稱名あるを思ふ。圀の上せして。その圀くを領とらむよ。狹圀を廣く。峻圀を平ら。損をれし所を修理堅。あども去ばなれ。彼圀造云くの御名此例ふ準へて。圀御臣ふあて。圀造の字ハ書とるを始。うて。伴美夜都古の美夜都古も。唱此同きは。ふや。がて此字を書ふら。牙るあゆげし。彼漢圀の大良造。まよ依れるよ。を。ちて師説ふ。圀造を。上代ふ。職ふて。即加婆有べ。うら。び。ちて師説ふ。圀造を。上代ふ。職ふて。即加婆

禰あ。正し。残。や。後。ふ。を。加。婆。禰。ハ。別。子。有。て。其。氏。の。中。ふ。圀。造。あ。り。那。良。の。こ。ろ。み。至。て。其。氏。人。の。中。み。て。圀。造。を。任。し。給。ふ。が。常。れ。り。然。る。も。其。圀。造。と。云。姓。多。賜。ひ。し。こ。と。も。統。紀。卅。三。此。二。葉。あ。ど。み。見。え。と。り。ま。と。大。室。二。年。ふ。を。諸。圀。く。造。の。氏。を。定。め。て。圀。造。紀。み。載。ら。れ。し。事。去。同。書。み。見。え。ま。と。陸。奥。圀。み。大。圀。造。圀。造。ち。て。圀。く。ふ。宰。と。並。べ。任。せ。ら。れ。し。事。も。同。ハ。八。卷。み。見。也。け。て。圀。く。ふ。宰。を。置。れ。て。後。古。圀。造。を。世。く。傳。へ。て。其。圀。字。治。め。と。り。漢。圀。孝。德。天。皇。此。御。世。よ。り。彼。圀。此。郡。縣。の。制。と。云。を。ま。給。び。て。京。を。ゆ。圀。司。多。か。を。る。く。遣。て。圀。く。を。治。め。し。め。給。ふ。こ。と。ふ。為。ま。り。其。を。り。前。ふ。も。宰。と。云。者。を。有。お。ま。ど。も。毎。圀。み。必。定。ち。て。置。れ。と。る。を。彼。御。代。と。云。あ。り。○。今。云。圀。之。宰。の。事。ハ。顯。宗。天。皇。卷。二。圀。造。を。圀。司。の。下。ふ。立。て。多。く。は。年。此。処。ふ。委。く。注。べ。し。郡。領。あ。ど。み。任。れ。正。ち。て。漸。く。ふ。衰。ち。ま。て。後。世。よ。は。遂。ふ。圀。く。の。圀。造。絶。て。今。世。ま。で。其。名。の。残。れ。る。を。出。雲。さ。て。を。

紀国おど此みお也。今云云の二国の国造のみ残れけりて
大抵諸の姓此中ふ。臣と連せハ。京北何とゆゑに住居て。殊
み親く朝廷に仕奉る氏く此尸外也。雄略卷遺詔臣連
郡司、隨時朝集と何依も、臣連けりて造は、其部の品類ふと
伴造を京近く住居せざるあり。ゆて造は、其部の品類ふと
ゆて。京北あまふに在るも有はし。と言れとるが如くもて。
まに国造、縣主、稻置おどは、皆国くふ在て。其處くを治む
依氏人の職號此尸と爲れるあり。臣連、国造、伴造と云べ
ぬぐひをむ、国造中よこめと。さて然国くふ在て。其趣も
るべし、師も既に然云れき。似とる中ふも、おらく、事状を見通はる。色くふ分れと
る。其高下差別は、師を今おとく、委曲みハ、大抵見え
辨へおとし、せ云まおれど。

て、国造、縣主、稻置と順次はく所思と也。其由を。成務天皇、
紀四年、大詔ふ。国郡立、長、縣、邑、置、首とあるを。五年九の處
ふ。今諸国立、造、長、縣、邑、置、稻、置、を、あ、ゆ、け、合、せ、て、考、る、よ。五
年の處乃文よ。諸国立、造、長とあるを。四年、大詔此。国郡立、
長とあるを受とまむ。此を古事記同天皇の段。ふ。定、賜、大、国、小
国、之、国、造、とあるよ當りて。国とは、古事記よ所謂大国を
云ひ。郡を也。古事記よ所謂小国ふ何とゆて。国造を定、賜
へるお依こと著く。縣、邑、置、稻、置とあるを。四年、大詔ふ。縣
邑置、首とあるを承とれむ。此を古事記よ。定、賜、大、縣、小、縣
之、縣、主、を、云ふ當りて。縣とは、古事記よ所謂大縣を云ふ。邑

とは。古事記の所謂小縣を云ふ也。あふ委くを成務天皇卷五年の処に注ふを見らるべし。

○鍔胤云。此卷を板了彫刻ある者は。上第五第六第七卷と同く。甲斐国。巨摩郡。古市場の村人。矢崎。隨美。および矢崎。豐長。まゝ同郡江原里人。内藤昌實等也。かくて。第五卷よび此卷小至りて。合せて四卷。此字第二帙也。

彫工 木邨房義刻

伊吹迺屋先生及門人著述刻成史書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 三卷 ○古史徵首卷 開題記四冊 神代系圖一冊 凡五卷
- 古史徵 神代部 六卷 ○古史傳 自一至八 二帙
- 神代系圖 折本 箱入 一帖 ○同 懷中小折本 一帖 ○同 挂軸 一幅
- 每朝神拜詞記 訂正折本 再刻 一帖 ○玉多須喜 十卷
- 靈能貞柱 二卷 ○入學問答 一卷 ○太元圖說 石 一幅
- 弘仁歷運記考 二卷 ○万聲大統譜 一幅 ○古道學神号 石 一幅
- 天津祝詞考 一卷 ○德行式 石 一枚 ○立言文 石 一枚
- 神字日文傳 二卷 ○疑字篇 日文傳 附錄 一卷 ○皇國度制考 二卷
- 古道大意 講本 二卷 ○靜乃岩屋 講本 二卷 ○醫宗仲景考 一卷

○皇典文彙 三卷 ○祝詞正訓 二卷 ○古史本辭經刻在四卷

○古今妖魅考全五卷之内 三卷 ○大祓詞正訓天津祝詞祝詞文例 一帖

○牛頭天王曆神辨 一卷 ○赤縣歷代尺図 一枚 ○木匠祖神号 一幅

○童蒙入學門 一卷 ○神德略述頌 一卷 ○古道訓蒙頌 一卷

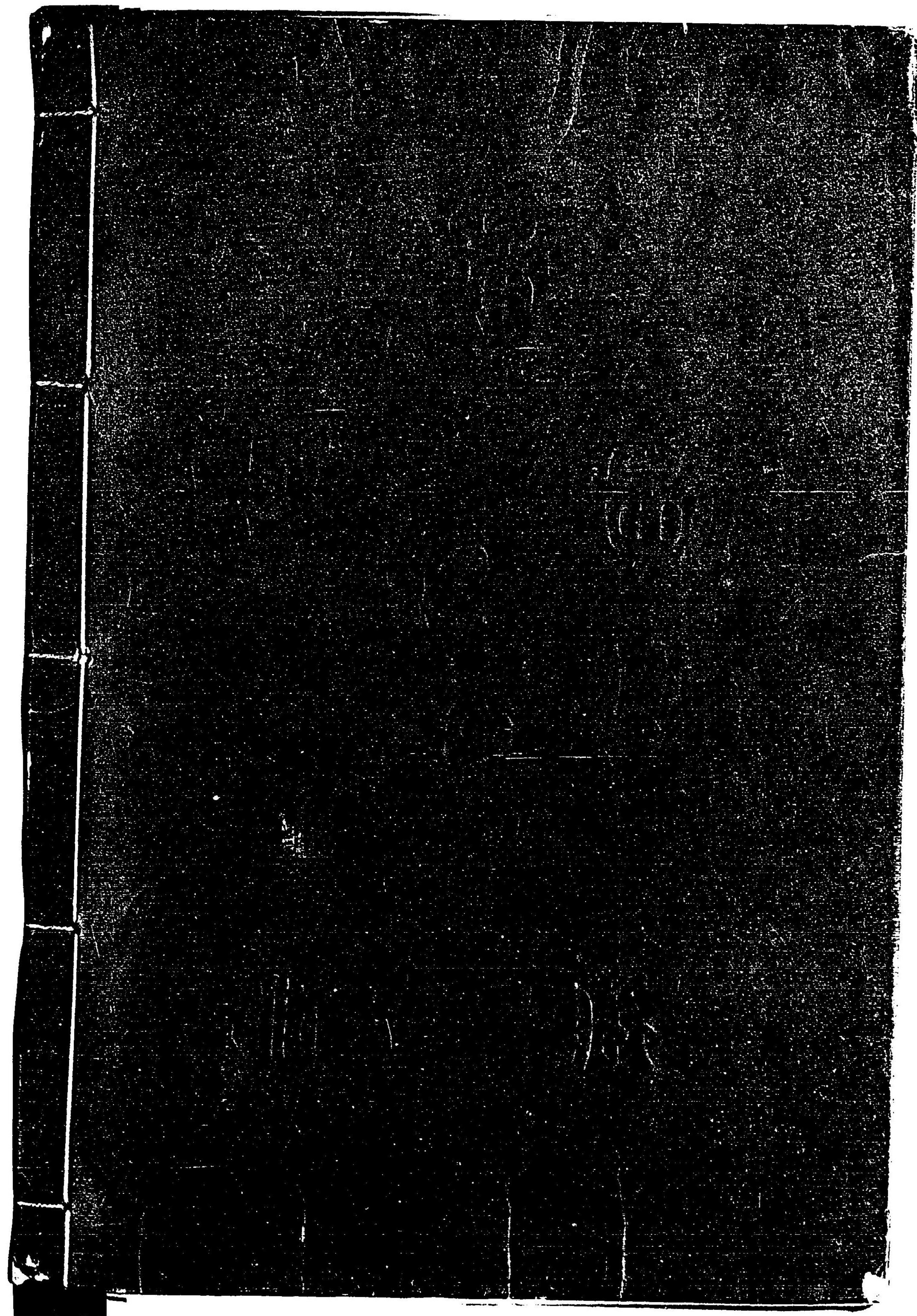
○宮比神御傳記附石指御神影 一卷 ○天滿宮御傳記畧繪入 二卷

○日女嶋考 一卷 ○古學二千文 一卷 ○草木撰種錄 一枚

○出定笑語附錄 三卷 ○悟道辨 二卷 ○伊吹於呂志 二卷

先生の著書都て百部巻數千巻に近く既小刻成の物右に如し但し百部
之内子孫小のみ傳遺さぬ物共五部假し各けり内書と云同門篤志此
者不六一覽を許されざる非中其え師家小就て問べし其餘七十五部
假し外書と名けり此れ次に上木して同志し示るし右内外の全書目
於其書等此大意を知むと愚をむ人は別不記せし著述書目集と云もの
一卷有り就て見へし 門人 生田國秀 河内盛征等記

195
34
111



古史傳

八

195
34
111